

NO.97

ISSN 1346-0382

第67回SGRAフォーラム

「誰一人取り残さない」 如何にパンデミックを乗り越え SDGs実現に向かうか

一世界各地からの現状報告一



第 67 回 SGRA フォーラム

「誰一人取り残さない」 如何にパンデミックを乗り越え SDGs 実現に向かうか 一世界各地からの現状報告―

■ フォーラムの趣旨

SDGs (Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標)は、2015年9月の国連サミットで、国連加盟 193カ国が採択した、2016年から30年までの15年間で持続可能で、より良い世界を目指すために掲げた目標。国連ではSDGs を通じて、貧困に終止符を打ち、地球を保護してすべての人が平和と豊かさを享受できるようにすることを目指す普遍的な行動を呼びかけている。具体的には、17のゴール(なりたい姿)・169のターゲット(具体的な達成基準)から構成され、地球上の「誰一人取り残さない(leave no one behind)」ことを誓っている。SDGs に取り組むのは、国連加盟国の各国政府だけではなく、企業、NPO、NGO などの各種団体、地方自治体、教育機関、市民社会、そして個人などすべての主体がそれぞれの立場から取り組んでいくことが求められている。

2020年はSDGsの5年目になる年であったが、新型コロナウイルスによるパンデミックが世界を席巻し、世界各国の経済や社会生活に多大な打撃を与え、世界大戦に匹敵する死傷者を出す悲惨な状況になってしまった。世界では先進国を中心にワクチン開発・供給などで取り組んで来ているが、多くの発展途上国は、資本主義の生存競争のなかで、パンデミックの対応に困難を極める状況に置かれているのが現状である。

本フォーラムは、SDGs の基本理念と目標について理解するとともに、いくつかの国をケーススタディとしてとりあげ、パンデミックを如何に克服して「誰一人取り残さない」SDGs の実現に対応すべきかについて議論を交わすことを通じて、「地球市民」を目指す市民の意識を高め、一人一人が SDGs に主体的に取り組むアクションを起こすきっかけを提供することを目的とする。

SGRAとは

SGRA は、日本の大学院で研究を行い渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となって、個人や組織が現代の課題に立ち向かう時に役立つ研究、問題解決の提言を、フォーラム、レポート、ホームページ等の方法で広く社会に発信しています。多分野多国籍の研究者がプロジェクトチームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから課題に対する分析・考察を行います。SGRA は、ある特定の分野だけではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することが SGRA の目標です。詳細はホームページ(http://www.aisf.or.jp/sgra/)をご覧ください。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からの SGRA 会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。 SGRA かわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。 http://www.aisf.or.jp/sgra/

「誰一人取り残さない」 如何にパンデミックを乗り越え SDGs 実現に向かうか

―世界各地からの現状報告―

日 時 | 2021年9月23日 (木・祝) 14:00~16:30

方 法 Zoom ウェビナーによる

主 催 (公財)渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA)

共催 (一社)東北亞未来構想研究所 (INAF)

総合司会 ミヤ・ドゥイ・ロスティカ (大東文化大学、SGRA)

開会挨拶 | 今西 淳子 (渥美国際交流財団)



【第1部】 基調報告

【報告1】

© 2022 SGRA

SDGs時代における私たちの意識改革

佐渡友 哲 (日本大学、INAF)

フィリピンにおけるSDGs

【第2部】 世界各地からの現状報告

フェルディナンド・C・マキト (フィリピン大学ロスバニョス校、SGRA)

【報告2】 ハンガリーにおけるSDGs

―水に関するハンガリー・中国の国際関係・協力を事例に―

杜世鑫 (INAF)

[報告3] 「アラブ持続可能な開発レポート2020」から読み解く

中東・北アフリカ地域のSDGsに向けた課題

ダルウイッシュ ホサム (アジア経済研究所、SGRA)

8

24

29

34

3

【報告4】	朝鮮民主主義人民共和国 (DPRK) における SDGsの取り組みと評価				
	李 鋼哲(北陸大学、SGRA、INAF)				
【報告5】	民主化プロセスとパンデミック 一歴史の運命のいたずらに翻弄されるスーダン暫定政府と国民―	43			

【第3部】 討論・総括

46

モデレーター: 李 鋼哲 (北陸大学、SGRA、INAF)

モハメド・オマル・アブディン (参天製薬 (株)、SGRA)

指定討論者:羽場 久美子 (神奈川大学教授·青山学院大学名誉教授、INAF)

三村 光弘 (環日本海経済研究所 (ERINA)、INAF)

パネリスト:報告者全員

総 括:平川 均(名古屋大学名誉教授、SGRA、INAF)

あとがきにかえて

64

李 鋼哲 (北陸大学、SGRA、INAF)

講師略歷 66

はじめに

ミヤ・ドゥイ・ロスティカ 大東文化大学、SGRA



みなさん、今日は第67回SGRAフォーラム「誰一人取り残さない」にご参加いただき、ありがとうございます。総合司会を担当する大東文化大学のミヤ・ドゥイ・ロスティカです。インドネシア出身です。SGRAの「構想アジアチーム」のメンバーです。よろしくお願いします。

渥美国際交流財団関口グローバル研究会が開催する SGRA フォーラムも 20年前に始まって今回で67回となります。

今回は、一般社団法人東北亞未来構想研究所(INAF)との共催で開催し、講師も両方のメンバーの皆様にお集まりいただきました。

フォーラムのタイトルは「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs 実現に向かうか」で、基調報告と世界各地からの報告が行われます。SDGs とは、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。英語ではSustainble Development Goalsです。

SDGs については、世界中で様々な議論や運動が起こっていますが、今回は日頃あまり触れられない、知ることができない、「朝鮮」「東南アジア」「東欧」「中東」「アフリカ」に焦点を当てて、報告と議論をしていただきます。

今而淳子 渥美国際交流財団



みなさん、こんにちは。

渥美国際交流財団常務理事、関口グローバル研究会(SGRA セグラ)代表を務 める今西と申します。

本日はオンラインで開催する第67回SGRAフォーラムにお集りいただき、あ りがとうございます。

渥美財団は、もともと、博士号を取得するために、日本の関東地方の大学院に 在籍して研究を続ける外国人留学生を支援する奨学財団ですが、奨学支援が終 わった後もずっと連絡をとりあい、一緒にプロジェクトをしようということで、 渥美財団設立5年目の2000年7月に関口グローバル研究会を立ち上げました。 今、私が居る渥美財団の所在地、東京都文京区関口から、グローバルに発信して いこうという名前です。

今回は元渥美奨学生の皆さんがたくさん協力してくださっていて、司会のミヤ さん、報告者のマキトさん、ダルウィッシュさん、アブディンさん、皆さん日本 の大学で博士論文を書いていらっしゃった時からのご縁です。

そして、もちろん、本日のフォーラムを共催してくださっている、一般社団法 人 東北亞未来構想研究所(INAF イナフ)の李鋼哲さんも、今から20年以上も 前にお会いし、就職された後もずっとSGRAのイベントを企画実施してくださっ たり、福島スタディツアーに参加してくださったり、パンチの効いたエッセイを 投稿してくださったり、絶大なご協力をいただいています。その李さんが、一般 社団法人を立ち上げられたので、それでは一緒にフォーラムをやりましょう、と いうことで本日のイベントになりました。

INAFの理事長は平川均先生が務めていらっしゃいますが、先生とのご縁は 2001年2月9日に有楽町の東京国際フォーラムで開催した第2回SGRAフォーラム「グローバル化のなかの新しい東アジア〜経済協力をどう考えるべきか〜」に、李さんにご紹介いただきゲスト講演をお願いしたことから始まっています。 ちなみに、この時のフォーラムでは、角田事務局長とマキトさんも報告されています。あれから20年が経ちましたが、平川先生には、現在、渥美財団の理事と 選考委員をお願いしています。このように、20年の歴史を踏まえ、さらにINAFという新しい研究所の船出を祝って、このフォーラムを開催できることを大変うれしく思います。

「誰一人とり残さない」というSDGsの目標を切り口に、先生方のお話を伺います。基調報告の佐渡友先生と、INAF研究員の杜世鑫さんは、会場(鹿島新館・渥美財団ホール)にお越しいただいています。指定討論の羽場先生と、三村さんはZoomでお入りいただきます。皆さんのお話を大変楽しみにしています。どうぞよろしくお願いします。



SDGs時代における 私たちの意識改革

佐渡友 哲

日本大学、INAF

要旨

いま私たちに求められていることは、私たちが「持続可能ではない世界」に 住んでいることを知り、そのことを強く意識することである。「知る⇒意識す る⇒考える⇒行動する」というプロセスが重要である。SDGs は、このことを 私たちに伝えているメッセージであると受け取ることができる。

SDGsの達成のためには、私たちの現代文明が行き着いた大規模化・集中化・グローバル化という仕組みを見直し、循環型社会を強化することであることを多くの人々が気づき始めている。企業の間では、SDGs の達成に協力・参加する経営が自分の会社を持続可能にするという考えが広がっている。温暖化・気候変動などの問題解決を意識した「サステイナブルな資本主義を追求することが求められている」(中西宏明・前経団連会長)のである。また、SDGs時代に、教員が求められていることは「持続可能な社会の創り手」を育成することである。この場合の「創り手」とは、経済成長に貢献する、いわゆるグローバル人材(人財)ではない。いま生活しているこの社会・世界が持続不可能であることを認識し、SDGs の理念を理解して地球的諸問題の解決へ向けて行動を起こす地球市民(global citizen)のことである。生活の場(ローカル)で学び、考えて、各自の意識や行動が変容するような教育に期待したい。

はじめに

皆さま、こんにちは。佐渡友哲と申します。本日はSGRAのフォーラムにお呼びくださり、大変ありがとうございます。聞くところによると、リモートで数十人の方が参加されて、海外からもご意見が伺えるということで大変楽しみにしています。そして、第2部では、皆さんの各地のSDGsの現状が報告されるということで、大変うれしく期待しております。私は30分項きましたので、今まで考え

8

てきたこと、体験したことを中心に写真や図をお見せしながらお話ししたいと思います。詳しい細かいことは別紙(p. 20~23)に書いておりますので、それとは離れて現場の話をお伝えしたいと考えています。よろしくお願いいたします。

今日は、三つのことをお話ししたいと思います。1番目は、今、私たちが体験している世界が「持続可能ではない」という現実を見てみましょう、現実は大変厳しいものがあるということをお伝えしたいと思います。2番目は、国連SDGs (持続可能な開発目標)の理念と方法は一体どういうことなのか、ポイントだけをご説明したいと思います。3番目は、どのような意識改革が必要なのか、将来に向かっての私たちの意識改革について触れたいと思っています。

宇宙から見た地球

まず、宇宙の話からしたいと思います。これは日本の宇宙飛行士第1号で、国際宇宙ステーション (ISS) に搭乗した毛利衛さんについてのお話です。彼が20年以上前に搭乗して帰ってきたときに、二つのことを言ったことを思い出します。

一つは、地球には国境がないということです。衛星から地球を見ていて、それをまず言いました。もう一つは、時の刻みがないということです。つまり、今日は9月23日であるとか、今日は正月だというのとは全く関係なく時間が経過し、地球は回っている。こういうことを言おうとしたのです。

ところが去年の正月に、あるテレビ番組に毛利さんが出られ、これらとは違った発言をしていました。この番組では次のような写真が紹介されたのです。衛星から見た夜の地球です(写真 1)。都市が光り輝いています。毛利さんがたまたま、こういうことをひと言おっしゃいました。「地球は限界ですね」。その番組はバラエティ番組だったので、環境問題など特別な真面目なテーマではなかったので、それで終わっていました。「地球は限界ですね」。この言葉は別の言い方をすれば、「サステイナブルではないな」「持続可能ではないな」ということだったのです。日本も中国も発電の70%以上は化石燃料に依存しています。世界中の発電所の3分の1は、石炭を使っているといわれています。この状況はサステイナ



写真 1: 衛星から見た夜の地球

ブルなのでしょうか? 宇宙から見える都市の明かりには、どのような意味があ るのでしょうか?

毛利さんは10年前に書かれた本の中で、既にこういうことを言っています。 「『生命のつながり』を忘れ、人類という特定の生物種だけが繁栄しても、生き延 びることはできない」(『宇宙から学ぶ』岩波新書)。彼は、宇宙船に乗って地球 を見ていました。自分がいる場所は漆黒の宇宙で、太陽の光がさえぎられるとき は真っ黒です。そして、宇宙船の外はマイナス150度。こんな死の世界にいるの だ。そういう所から地球を見たのです。生命というのは大変いとおしい、自分の ふるさとだということを実感したのです。彼は、この40億年途切れることなく 続いてきた生命体のつながり、地球生命体と彼は言っていますが、これを研究す る視点が必要だということで、自ら「ユニバソロジ(universology)」という造 語を作りました。こういう観点から見ると、要するに宇宙を体験した人は、「地 球がいかに貴重か | 「生命で溢れているこの地球をいかに守るか | ということを 強く感じたのだと受け取っていいと思います。

インドのラダック地方で起こっていること

ここで、宇宙船から全く明かりの見えないまちを紹介します。この写真は、イ ンドの北の方にあるラダック地方の中心的な都市で、レーというまちです(写真 2)。こういう荒涼とした地域にあります。見上げると、ヒマラヤの山が少し見 えます。

インドのデリーから飛行機に乗って1時間ちょっとで行くジャンムー・カシ ミール州という所にあるのがラダック地方です(写真3)。ここはチベット文化 圏です。標高が3.500mあります。人口は27万人しかいません。ここの地域は ずっと閉ざされていて伝統的なまちでしたが、ここに1970年代から外国人が入 るようになりました。それまでは外国人が入ることは禁止されていました。なぜ かというと、東は中国との国境があり、西はパキスタンとの国境があります。こ のレーというまちから車で15分ぐらい行くと、インドの軍事基地が広がってい て非常に危うい所だからです。1970年代に外国人が入るようになり、トレッキ



写真2:ラダック地方



写真 3

10



写真 4: レーのまち



写真5:ラダックの「行動宣言」

ングができる観光地として有名になりました。東にネパールとブータンがあります。西にパキスタン、アフガニスタン、イランがあります。

これが人口5万人ぐらいのレーというまちです(写真4)。100 mぐらいの銀座通りがあります。そこには外国人向けの商店がたくさんあります。夏場だけですが、ヨーロッパを中心にいろいろな国からここにトレッキングをしに人々がやってきます。

特にレーのまちは、急激なグローバル化といわゆる近代化によって、社会が大きく変えられつつあり、いびつな発展をするのではないかという問題が提起されていました。SDGsが公表される前から、現地の人たちは持続可能なまちづくり、循環型社会をめざす活動をしていました。それを聞いて、私は学生たちをここに連れて行き、「持続可能とは何だろうか」「国や社会が発展するというのはどういうことなのか」という問題意識をもって、現地を体験しながら学んできました。日本の社会と同じように、食料品店や雑貨店ではプラスチックの包装や容器に入った商品が多く並んでいました。まちの至る所にプラスチックごみがたくさん捨てられていました。農薬や化学肥料を使った農業が一般的になっていました。そのような状況の中、プラスチックのレジ袋を禁止する活動をしている婦人団体や有機栽培の野菜を作っている農家を訪ねました。

また行政と市民が一緒になって、「Ladakh Wisdom Forum」(ラダックの知恵フォーラム)という、ラダックの人々の知恵で新しい自分たちの行動宣言を世界に向けて発信していることを知りました(写真5)。それは、持続可能な社会をめざす、環境に優しい農業を大切にすることなどを宣言したもので2013年に出されました。つまり、SDGs公表の2年も前に彼らは持続可能な社会をどうやってつくろうかと、かなり真剣に考えていたのです。

私たちはラダックでたくさんのことを発見しました。第1に、ヒマラヤの雪が どんどん融解し洪水が起き、水不足が起きているということです。この地域の 人々は、ヒマラヤの氷河が少しずつ融けてきて、その水を1年間使っているわけ です。それが今、ヒマラヤの氷河が急激に解けているので、水が一挙に流れ出 て、流れた後は水がなくなるということが起きているのです。第2に、種類が限 られた高原野菜しか採れないこの地で、最近、スイカとイチゴが採れるように

なったというのです。これは考えられないことです。例えば、富士山の7合目で イチゴが採れることと同じようなことなのです。これは地球の温暖化を肌で感じ る場所だと私は実感しました。

この地域は、私たちがかつて体験したこと、いま直面していることが象徴的に 表われているのです。持続可能な社会はどうやってつくったらいいのか、この地 域が発展するというのはどういうことなのか、レーのまちの銀座通りにスター バックスやマックができることが発展なのかなど、学生たちといろいろなことを ここで議論してきました。帰国してから、学生たちはそれらの体験から理論枠組 みを構築して成果を発表しました。

地球温暖化問題を考える

現在、国連ではサミットが開催されています。今年は韓国の人気グループの BTSが歌を披露して演説しました。SDGsや気候変動のことについて彼らがメッ セージを出したのです。人気グループがこのようなメッセージを発信したこと で、かなり世界の若者に影響を与えていると思います。2019年は、国連の気候 サミットでグレタさんが話をしました。彼女は衝撃的なことを言いました。「生 態系が破壊されているのに、あなたたちが話していることはお金のことや経済 成長のことばかり」だと。「How dare you!(よくそんなことが言えますね!)」 という、あまり上品な言葉ではないことを発していました。彼女は高校を卒業 し、今では温暖化防止の活動を広げるために、世界の若者をつなぐネットワーク づくりに奔走し、日本の若者にも影響を与えています。

この温暖化・気候変動は、国連で一番重要な問題のひとつです。地球温暖化 に対して懐疑的な人々がまだいます。しかし2021年8月に出たICPP(気候変動 に関する政府間パネル)の第6次評価報告書によると、「疑う余地がない」とい う言葉が初めて入りました。これまで2001年第3次報告書では、人間が行った 行動によって地球が温暖化している「可能性が高い」(66%以上)という報告が ありました。2007年第4次報告書は、「可能性が非常に高い」(90%以上)とい う報告でした。そして2013年第5次報告書では、「可能性が極めて高い」(95% 以上)でした。今年は「人間の影響が温暖化させてきたことは疑う余地がない」 と、完全に人間の行いで地球が温暖化しているということを明言しました。

これを私はかなり評価しています。ICPPは、1000人規模の科学者、政府関係 者が集まっています。今年の第6次報告書は、二百数十名の科学者が集まって報 告書を作成ました。日本の研究者も10人ぐらい参加しているそうです。

プラスチックごみの問題

次の写真は、3年前、鎌倉市の由比ヶ浜に打ち上げられたシロナガスクジラの 赤ちゃんです(写真6)。この赤ちゃんの腹から、プラスチック片がたくさん出



写真 6:由比ヶ浜に打ち上げられたシロナガスクジラの赤ちゃん

てきたのです。実は、日本だけでなくフィリピンでもこういったことがあったという報告を受けています。これは大変なことだと、神奈川県はすぐに反応して、これはクジラからのメッセージだということで、「かながわプラごみゼロ宣言」をするようになりました。身近にこのようなことが起きているのですね。神奈川県が調べたのですが、海から流れてきたプラスチックよりも、陸の川から流れてきたプラスチックの方が多いことが分かりました。これは世界的な問題です。

2050年には海洋にあるプラスチックごみを全部集めた総量と、海洋の魚の総量が等しくなるという専門家もいます。魚の量をもしかしたら上回るのではないかという報告も出されています。プラスチック廃棄の問題は私たちの日常生活に関わった、大変大きな問題です。

熱帯雨林を破壊するプランテーションの問題

ところで、みなさんが毎日お世話になっているものにパーム油があります。パーム油はパームヤシの実から作られます。実から抽出したものがパーム油で、私たちは日常的に使っています。シャンプー、洗剤、せっけん、化粧品に使われ、食べ物ではマーガリン、お菓子類、カップ麺、アイスクリームなどに入っています。こういうものがどこで作られるか。インドネシア、マレーシア、タイが世界の90%のパーム油を作っています。生産地では大規模なプランテーションで労働者の手作業によって作られています。

多くの大規模なパームヤシのプランテーションは、熱帯雨林を破壊して造られています。時には、森林の木をカットする労力を省くため、熱帯雨林を火で燃やしているという報告も受けたことがあります。いったん燃やしたら予想外の所まで飛び火するので、慌てて消しに行くという作業をしている写真を見たことがあります。二酸化炭素を吸収し生物多様性に富む熱帯雨林が失われると、元に戻すことは非常に困難です。また、カリマンタン島ではオランウータンの生息地がどんどん小さくなっています。

こうした状況の中で、私たちはどのようなことができるのか。英国のNGOが 次のような発表をしていました。英国のスーパーマーケットに並ぶ食料品の約半 分に、パーム油が使われている。パーム油が使われている商品を買わない、ボイ コットをすることは不可能という発表でした。大量生産が可能で良質で安価な パーム油は私たちの生活に切っても切れないモノになっています。私たちが注目 すること、できることは、これ以上熱帯雨林を破壊したプランテーションを造ら せない、現地の労働者に農薬などの健康被害がないか、最低賃金や労働時間が守 られているのか、児童労働はないか、教育はどうなのかということだと思いま

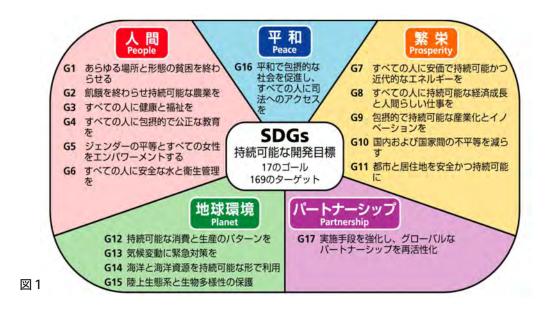
国連SDGsの理念と方法

これまで「持続可能ではない」世界について、述べてきました。いろいろな人 がこういうことを言っています。「人類は自然に戦争を仕掛けている」(アントニ オ・グテーレス国連事務総長)、「地球は私たち人間なしでも存続できるが、私た ちは地球なしでは存続できない」(アミーナ・モハメッド国連副事務総長)。モハ メッドさんは、長い間、SDGsをつくっていく、議論していく過程で大変重要な 役割を果たしているナイジェリア出身の女性です。

ここで、国連のSDGs について簡単なポイントだけ説明したいと思います。私 は、この5点が大事だと思っています。

1点目は、「持続可能な社会を構築しないと人類に未来はない」という強い メッセージが描かれていることです。2点目は、このフォーラムのテーマとなっ ている「誰一人として置き去りにしない」という非常に野心的な取り組みです。 国連は本来、主権国家の集まりですから、世界の一人一人には注目しない組織で す。そこに注目し関心をもつのは国内の課題だからです。それを「誰一人として 置き去りにしない」と言っているのですから、非常に野心的だといえます。3点 目は、貧困・教育・経済不平等・環境・平和・公正など、達成すべき目的はたく さんあり、ばらばらのようで、相互連結性があることです。これは後で紹介しま す。 4 点目は、政府や国際機関が担当するだけでなく、SDGsの目標を達成する ために、自治体・企業・市民団体・学校・個人など、様々なアクターが全員参加 であるということです。これは国連のキャンペーンでは初めてではないかと思い ます。5点目は、途上国だけではなく、先進国も目標に向かって行動しているこ とです。2000年のMDGs(ミレニアム開発目標)は途上国の問題だというふう に受け取られました。今回はそうではなく、先進国も目標に向かっているのだと いうことです。

図1はSDGsの17の目標(ゴール)を分類したものです。これは「2030アジェ ンダ」にある五つの分類を表にしたもので、人間(people)、平和(peace)、繁 栄 (prosperity)、地球環境 (planet)、パートナーシップ (partnership) です。 みんな英語の頭文字がPですので、五つのPといわれます。この中ではいろいろ なものがばらばらにあると感じられますが、実はそうではありません。例えば貧



困問題を解決しようとしたら、安全な水とトイレが必要です。衛生的な環境が必要です。そして、貧困から抜け出すためには教育が必要です。誰でも教育が受けられるようにするためには、ジェンダーの平等も必要です。いろいろなことが関係しています。従って、この17の目標は、それぞれが関連し合って、みんなが全員で頑張らなければいけないという目標だと私は考えます。

世界の食卓から考える持続可能性

これから食卓に並んだ食料の写真をお見せします。世界のいろいろな家庭にお 邪魔して、1週間分の食料を並べてもらい写真を撮りました(開発教育協会「世 界の食卓」から)。この国はどこでしょうか(写真7)。ちょっとラダックと似て います。チベット文化圏ですね。お分かりになりますか? これはブータンで す。野菜が多いですね。私たちの食卓と違って加工食品が少ないですね。これを 頭に焼き付けて次の食卓をご覧ください。



写真7:1週間分の食料(ブータン)



写真8:1週間分の食料(インド)



写真9:1週間分の食料(ドイツ)

次の写真です (写真8)。これはインドです。比較的に豊かなインド人の家庭 ですね。それほどプラスチックは多くないなと感じます。次の写真はどこの国で しょうか(写真9)? これはよく見ると分かります。文字や、前に並んでいる 飲み物、瓶は何でしょうか。あれはビールですね。これはドイツです。ドイツ人 の家庭の1週間分の食料です。次の写真はどこでしょうか(写真10)? 右端 に「塩らーめん」がありますね。人気があるインスタントラーメンですね。これ はもちろん日本です。

これらの写真をご覧になってどう思われますか? 私たちは持続可能な食事を しているか、どれだけ遠くから来たものを食べているか。マイレッジや地産地消 を考えたり、工場で作られた食品が多いのか、プラスチック包装がどれだけ使わ れているのか、廃棄物はどれくらいか、環境に優しいのか、いろいろなことに改 めて気づかされます。



写真 10:1週間分の食料(日本)

SDGs時代をどのように位置づけるか

図2は、産業革命から2015年までの発展モデルです。西洋の近代化は、産業革命の延長上で大量生産・大量販売・大量消費を実現してきた発展モデルとして捉えることができます。私はちょっと古い人間ですので、1970年代のことを覚えています。1970年代から、その発展モデルとは違うオルタナティブな発展の道を歩んできたのではないかと考えています。私の記憶では、1972年の国連人間環境会議、それからローマクラブが『成長の限界』を出したあたりから、それまでの時代は間違っているという考え方が出てきたように思います。

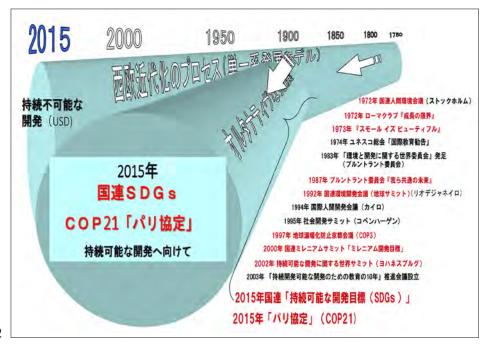


図 2

そして、2015年、国連のSDGsとCOP21(パリ協定)に達しました。つまり、 1970年代に1度、人類の生活を「持続可能な発展」に見直そうという時期が始 まったのです。持続可能な開発・発展ということばは、1987年の『ブルントラ ント報告』で公表されて世界に知られるようになりましたので、当時は使われて いませんでしたが。その時代を体験した私たちは、地球環境問題に強い関心をも ち、国家・政府だけに任せられない、世界的な課題に向かうという情熱があった ように思います。そして、2015年にもう一つ新しい時代がSDGsとパリ協定と共 に始まった。つまり、2番目の枝分かれが今、やってきたのではないかというの が私の認識です。これについては後で、皆さんからご意見をいただければうれし いです。

まとめ:私たちの意識改革

最後に、どのような意識改革が必要なのかということをお話ししたいと思います。 1点目は、私たちが「持続可能ではない世界」に住んでいることを意識するこ とです。

2点目は、「人間中心主義」ではなく「生態系中心主義」に変えることです。

3点目は、「宇宙船の目」「鳥の目」「虫の目」で私たちの生活を考えることで す。「宇宙船の目」は、毛利衛さんのあの視点です。熱帯雨林を上から見ること は「鳥の目」です。家庭の食卓から見ることは「虫の目」です。「宇宙船の目」 と「鳥の目」と「虫の目」が同時に必要ではないかということです。人によって はどちらかに偏っています。私は多分、「宇宙船の目」と「鳥の目」に偏ってい るのではないかと思います。実際、家庭のごみ出しするときに、燃えるごみか燃 えないごみか、プラスチックか危険物か、まだあまりうまく分類できないので す。そういう「虫の目」も非常に大事です。三つの目で全体的に考える視点が重 要だと思います。

4点目は、「世代間の公平性」と「世代内の公平性」という視点を意識すること です。今、地球上で同じ世代の人が生活しています。ところが、ここに不公平が たくさんあります。例えば、ワクチンの問題でも、先進国は2回目が終わって3 回目を打とうとしています。途上国では、まだまだ1回も受けられていない人が います。これは世代内の不平等が起きているのです。そして私たちと、これから 将来生まれてくる人、その世代間にも不公平があります。今、私たちが温暖化を どんどん促進させると、将来の世代の人は困ります。つまり、世代間と世代内の 公平というものに私たちはいつも注意する視点が必要ではないかということです。

5点目は、「全員参加」で、それぞれ「自分ごと」として考えることです。 こういうことを私は教育の中で導入することが非常に大事だと思います。今、 SDGs は学校教育の中にもどんどん入っていきます。学校の先生方は、どういう 勉強をしたらいいか大変必死になって、お互い励み合って勉強しています。大学 でもそうです。大学のいろいろな科目の中で、英語の科目でも歴史でも経済で も国際関係でも、SDGsが取り上げられています。つまり、私たちの教育の目標

は、「持続可能ではない世界」というものを認識して、持続可能な世界にしよう と推進する、そういう人を育てるということです。

これは昔からよくいわれて、私も何十年も使っていますが、Think globally, act locally! (地球規模で考え、地域で行動しよう)という言葉があります。この言葉は、もう使い古されてしまい、カビが生えているように見えますが、今、SDGsの時代にまた復活して、地球市民を育てるときの大事な言葉になっているように思います。それに私は少しプラスしたいのです。Think globally, act locally, change personally!!! 個人的にどんどん変わっていかなければいけない。今、私たちが意識を変える時代ではないかと思います。

ご清聴どうもありがとうございました。

第 67 回 SGRA フォーラム

2021.09.23

基調講演:SDGs 時代における私たちの意識改革

別紙

佐渡友 哲

1

今日、サステイナブル (sustainable/持続可能な) という言葉は、地球環境や資源を 語るときばかりではなく、国家、自治体、企業、産業、生活様式などの現状と将来を語ると きにも共通のキーワードとなっている。その背景には、大量生産・大量消費・大量廃棄とい う産業革命以来の人類の発展?に行き詰まりが見え始め、このままでは限界が明らかにな ってきたからである。つまり私たちがこのまま同じようなライフスタイルを続けると、私た ちの生活そのものがサステイナブルではなくなるという危機感が共有されるようになった のである。世界中の人々がアメリカ人と同じようなライフスタイルで生活したならば、地球 2つ分の資源が必要だ、といわれたのは20年以上前であった。今や世界中の人々が日本人 なみの生活をしたら地球 2.8 個分の資源が必要となる、という専門家のことばも耳にするよ うになった。「人類は自然に戦争を仕掛けている」(国連事務総長・アントニオ・グテーレス) のかもしれないし、「人間は地球にとって『がん細胞』といっても過言ではない」(生物学者・ 福岡伸一)のかもしれない。私たちはいま、「持続可能ではない世界」に住んでいるのであ る。

持続可能な開発(Sustainable Development)という言葉が知られることになったきっか けは、1987年に刊行された『我ら共通の未来』(Our Common Future) でキーワードとし て使用されたことにある。その本文において持続可能な開発とは「将来の世代が自らの欲求 を充足する能力を損なうことなく、今日の世代の欲求を満たすこと」(It meets the needs of the present without compromising the ability of future generation to meet their own needs.)と定義づけられた。この定義は難しそうに思えるが、人々が以前より配慮してきた 慣行であり、知恵でもある。例えば北米の先住民の間では昔から「何か開発するときには7 世代先のことを考える」「木を1本切ったら、2本植林する」という言い伝えがある。広義 の開発とは人間が自然に手を加え、それを利用することである。

2

サステイナブルという言葉を今日のように知らしめたのは国連 SDGs である。2015 年 9 月の国連サミットにおいて、国際社会が $2016 \sim 30$ 年に取り組む「我々の世界を変革する: 持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」(Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development) (以後「2030 アジェンダ」) が採択された。この「2030 アジェ ンダ」の後半に、持続可能な開発目標(SDGs= Sustainable Development Goals)が示さ れている。SDGs には、図表に示したように、17 の目標と 169 のターゲット(それぞれの 目標に 5~19 掲げられた到達目標) が盛り込まれており、2030 年までに各目標を達成する

ことになっている。そしてこれは、2015 年に目標年を迎えたミレニアム開発目標 (MDGs=Millennium Development Goals) の後継としての役割を果たすことになったのである。

SDGs を含む「2030 アジェンダ」の策定には、様々な国際機関や首脳たちが関与している。UNDP (国連開発計画)、DESA (国連経済社会局)、世界銀行などが参加したタスクフォース、パン・ギムン国連事務総長 (当時)が主導し各国の現職、元首脳らを集めたハイレベル・パネルなどが関わっている。MDGs が先進国と一部の国連職員を中心にまとめられたことへの反省から、幅広い国際機関やリーダーたちが関わるようになったのである。また、時代的背景として、1992 年にリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議(地球サミット)の流れがある。その 20 年後のいわゆる「リオ+20」と呼ばれる国連持続可能な開発会議の場で、SDGs の内容が議論され、コロンビア政府によって提案された包括的な開発目標が受け入れられたのである。その後これを審議するオープン・ワーキング・グループ (OWG) が組織され、ここでは 30 か国の専門家や非政府組織 (NGO)、市民団体などからの参加者がオープンな議論を展開した。

SDGs における 17 のゴール(目標)と「5 つの P」



出典:筆者作成

3

SDGs に掲げられた 17 目標と 169 のターゲットは、持続可能な開発について、より細かく分類すると、人間: G1~G6、繁栄: G7~G11、地球環境: G12~15、平和: G16、パートナーシップ: G17 となる。この分類の仕方は、「2030 アジェンダ」の前文で述べられている「5 つの P」、すなわち People (人々)、Planet (地球)、Prosperity (繁栄)、Peace (平和)、

Partnership(パートナーシップ)に基づいている。国連は基本的に、主権国家を構成員と する国家間国際組織(IGO)であるが、個人の貧困や格差などに注目するほか、目標達成の ためには自治体、企業、市民団体など多様なアクターを巻き込むことを前提としている。 SDGs 達成に向けての国連の理念と目標には、次のような特徴がある。

- ① 持続可能な社会を構築しないと人類に未来はない、という**強いメッセージ性**。
- 「誰ひとりとして取り残さない」(leave no one behind=LNOB) という**野心的取り組み**。
- ③ 貧困・教育・経済不平等・環境・平和と公正など、達成すべき目標は**相互連結的**
- ④ 達成に向けて政府・国際機関・自治体・企業・市民団体・個人などが全員参加。
- ⑤ 途上国だけではなく先進国も達成目標に向かって行動。

国連の全加盟国193カ国によって採択された「2030アジェンダ」には、「私たちは、地球 を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」「誰ひとりとして取り残さないことを誓 う」(We pledge that no one will be left behind.) と記されている。持続可能な社会を取り 戻さないと人類に未来はないとする危機感があるからこそ、SDGs には強いメッセージ性が 感じられる。SDGs の 17 分野の目標に掲げられているものは、貧困をなくそう、飢餓をゼ ロに、安全な水とトイレを世界中に、公正な教育をみんなに、ジェンダーの平等を実現しよ う、生産と消費の責任、気候変動の対策など、一見、個別の目標のように見える。しかしこ れらは相互に連結性をもつ。貧困をなくすためには安全な水とトイレが不可欠で、仕事を得 るためには公正な教育とジェンダーの平等が求められるからである。

SDGs は先進国の私たちにも、ジェンダーの平等、生産と消費の責任、そして気候変動へ の対策などを要求している。大量生産と大量消費の中で豊かな生活を享受している先進国 の人々も、食品の大量廃棄、レジ袋・ペットボトルの大量処分・廃棄、そして温室効果ガス の大量排出などの課題を抱えている。海洋生物に甚大な影響を及ぼすプラスチックごみの 海洋排出は、毎年約 800 万トンといわれている。これは先進国と途上国を問わず、今や世 界の環境汚染問題である。また目標達成のために、政府から企業や私たち個人に至るまで、 全員参加が求められている。2000年の MDGs は、途上国が達成すべき目標のように受け取 られたが、SDGs は先進国の課題をも含む、全人類的な目標なのである。

いま私たちに求められていることは、私たちが「持続可能ではない世界」に住んでいるこ とを知り、そのことを強く意識することである。「知る≫意識する≫考える≫行動する」と いうプロセスが重要である。SDGs は、このことを私たちに伝えているメッセージであると 受け取ることができる。SDGs の達成のためには、私たちの現代文明が行き着いた大規模 化・集中化・グローバル化という仕組みを見直し、循環型社会を強化することであることを 多くの人々が気づき始めている。「2030アジェンダ」のタイトルは「我々の世界を変革する」

(Transforming our world)である。トランスフォームとは、ある形から別の形に変容させ

ることを意味している。例えば、ガソリン車の大量生産が始まった 20 世紀初頭の T型フォードの発売から、今日の電気自動車 (EV) の出現までおよそ 100 年かかっているが、地球環境問題から見ると重要な社会変容である。SDGs 時代は同時に、長い時間を必要とする「グレート・リセット」の時代でもある。

企業の間では、SDGs の達成に協力・参加する経営が自分の会社を持続可能にするという考えが広がっている。温暖化・気候変動などの問題解決を意識した「サステイナブルな資本主義を追求することが求められている」(中西宏明・経団連会長)のである。また、SDGs 時代に、教員が求められていることは「持続可能な社会の創り手」を育成することである。この場合の「創り手」とは、経済成長に貢献する、いわゆるグローバル人材(人財)ではない。いま生活しているこの社会・世界が持続不可能であることを認識し、SDGs の理念を理解して地球的諸問題の解決へ向けて行動を起こす地球市民(global citizen)のことである。

Think globally, act locally! (地球規模で考え、地域で行動しよう) というキャッチコピーは、1972年の国連人間環境会議に向けて提起されたといわれているが、筆者の経験では、80年代に米国のNGOがステッカーや缶バッジに表記して広まった気がしている。すでに使い古されたこのフレーズがいま、地球市民の精神を支えているようにも思う。そして生活の場(ローカル)で学び、考えて、各自の意識や行動が変容するような教育に期待したい。Think globally, act locally and change personally!!

報告



フィリピンにおけるSDGs

フェルディナンド・C・マキト

フィリピン大学ロスパニョス校、SGRA

おそらく他の多くの発展途上国と同じように、フィリピンもパンデミックに よりSDGsへの取り組みが大幅に妨げられている。「COVID-19で死ななくて も、仕事が無くて飢えて死んでしまうだろう」と庶民がよく口にしている。安 全性と経済を両立することは困難である。SDGsは17もの目標があるので、目 標の達成だけでなく、目標の併立という課題が浮上した。

しかし、フィリピンでは明るい兆しも見えてきたので、ここでは三つの取り 組みをとりあげたい。(1) 国内農業の重要性の見直し。輸入が落ち込んで、安 泰だった食料供給が死活問題になった。農業部門は一番貧しく遅れていたが重 要性が見直されて、活性化が政策の優先課題となりつつある。(2)多くの有力 な民間企業が、株主だけではなく、社会的役割も重要であるという認識が芽生 えている。繁栄も災難も共有しようという呼びかけが印象的。(3)大学は学術 的な実績だけではなく、SDGsに関する評価も話題になりつつある。学術誌だ けではなく、社会へのインパクト・ファクターが問われている。以上の三つの 明るい兆しが続けば、フィリピンは危機を機会に転換できると期待している。

こんにちは。フィリピンのマキトです。早速、「フィリピンにおけるSDGs」 について発表させていただきたいと思います。

まず、SDGsと発展途上国についてです。今年6月に、国連は持続可能な開発 に関するハイレベル政治フォーラムを開催し、国連事務総長は、SDGs を実現す るための試みを好転させることは「可能であり、やるべきだ」と発言しました。 ところが、今、世界にまん延しているCOVIDパンデミックは、400万人の命を 奪い、世界経済を破壊し、12.4千万人を極度な貧困に陥れ、今でも深い苦しみを 与え、世界のGDPは去年はマイナス4.6%成長と推定され¹、SDGs計画の進展を 妨げています。

さらに、国連事務総長は「不平等な所得・富の分配を持続させてはならない」 と警告しました。

世界の2,500人の億万長者の純資産は、コロナ禍でも毎日52億ドルずつ増えて

24

¹ https://news.un.org/en/story/2021/07/1095792

います。それに対して40億人は、基本的な社会的保障さえないことが明らかになっています 2 。

環境の面でも芳しくありません。生物多様性は、これまでにない割合で急激に低下しています。100万の生物種が消滅の危機に直面しており、毎年1000万 ha の森林が失われていると警鐘を鳴らしました。二酸化炭素濃度は過去300年間で最高レベルに達しました。これは産業革命以前の148%にもなる高さです 3 。私が調べたところ、 CO_2 の排出量は、このパンデミックにより一時的に落ち込んでいたのですが、その後再上昇しているのです 4 。

フィリピンの現状

フィリピンの状況を見てみましょう。「COVID-19で死ななくても、仕事がなくて飢えて死んでしまう」とフィリピンの庶民がよく口にしている言葉です。調べてみると、2020年の失業率は、フィリピンの10.3% に対して世界は6.5% です。それに2020年のGDP成長率は、フィリピンではマイナス9.6% ですが、世界ではマイナス4.6% です。つまり、フィリピンの経済活動の落ち込みは、世界平均のおよそ2倍ということです。

All Europe North America Asia				South America Africa Oceania				出所: worldometer			
#	Country, Other	Total Cases IF	New Cases II	Total Deaths	New Deaths	Total Recovered	New Recovered	Active Cases	Serious, Critical	Tot Cases/ 1M pop	Deaths/ 1M pop
	World	227,910,616	+105,850	4.685,699	+1,929	204,591,921	+120,048	18,632,996	100,924	29,239	601.1
į.	USA	42,634,054		688,486		32,347,726		9,597,842	25,209	127,897	2,065
#	Country, Other	Total Cases 17	New Cases	Total Deaths II	New Deaths IT	Total Recovered	New Recovered	Active Cases	Serious, Critical	Tot Cases/ 1M pop	Deaths/ 1M pop
19	Philippines	2,324,475	+20,336	36,328		2,100,039	+10,028	188,108	3,170	20,877	326
20	Peru	2,164,380		198,891		N/A	N/A	N/A	1,071	64,558	5,932
21	Malaysia	2,049,750		22,355		1,800,278		227,117	1,234	62,366	680
22	Netherlands	1,979,114		18,097		1,888,337		72,680	205	115,194	1,05
23	Iraq	1,967,187		21,683		1,846,158		99,346	626	47,620	52
24	Czechia	1,685,435	+550	30,427		1,649,999	+10	5,009	29	157,033	2,835
25	Japan	1,663,024	+5,990	17,030	+71	1,551,847	+11,889	94,147	1,615	13,198	13
26	Chile	1,645,820		37,293		1,602,703		5,824	463	85,212	1,931
27	Canada	1,564,089		27,325		1,493,619		43,145	638	41,007	716
28	Bangladesh	1,538,203		27,109		1,494,090		17,004	1,432	9,229	163
29	Thailand	1,448,792	+14,555	15,124	+171	1,304,247	+13,691	129,421	4,387	20,694	210
30	Pakistan	1,218,749	+2,928	27,072	+68	1,125,952	+13,716	65,725	4,960	5,391	120
31	Belgium	1,217,473	+2,359	25,494	+8	1,129,393	+1,411	62,586	214	104,499	2,18
32	Israel	1,208,403		7,465		1,117,027		83,911	654	129,574	800

図 1

- 2 https://news.un.org/en/story/2021/07/1095792
- 3 https://news.un.org/en/story/2021/07/1095792
- 4 https://www.nature.com/articles/d41586-021-00090-3
- 5 https://www.bworldonline.com/unemployment-rate-hits-record-high-in-2020/
- 6 https://www.statista.com/statistics/279777/global-unemployment-rate/
- 7 https://www.bworldonline.com/unemployment-rate-hits-record-high-in-2020/
- 8 https://news.un.org/en/story/2021/07/1095792

死亡率はどうなっているでしょうか。統計を調べてみると、COVID-19による 死亡率は世界では2021月9月17日時点で人口100万人当たり601人です。これ に対して、フィリピンのCOVID-19による死亡率は、2021月9月17日時点で人 口100万人当たり326人です(図1)。

つまり、フィリピンは経済の落ち込みは世界のおよそ2倍ですが、死亡率は世 界の半分です。失業しない、感染しないという二つの目標を同時に達成させるの は、フィリピンの庶民が考えているとおり困難なのです。ましてや、SDGsの17 の目標達成は難しいと言わざるを得ません。

農業、学問そして資本主義を見直す機会

それでは、どうすればいいでしょうか。フィリピンのこの危機に際しての動き を、私が知っている範囲内でご紹介します。

その一つは、農業を見直す機会です。フィリピン大学の経営・経済学部の記念 セミナーで、東南アジア地域農業研究センター(SEARCA)のセンター長は、 パンデミックを乗り越えるために、農業研究・開発の経済学やビジネス研究を呼 び掛けました。

COVID-19の経験から得た大切な教訓は、いかに食料システムが重要であるか ということ、そしてそのシステムがいかに社会的な危機、特にパンデミックに対 してもろいかということです。センター長は、農業の在り方、食料生産、そして 食料そのものの見直しの必要性を訴えたのです。そして、人間の研究や福祉を最 大化するためには、農業部分の抜本的な変革を加速する必要があると訴えたので す%

今後5年間に見直すべき課題は、持続可能な農法の研究・開発、近代的ネット ワークの構築や革新的な市場へのアクセスにより、農家の生活の質を高める政策 への転換なのです。農業部門は本当は優先的に開発されるべき部分ですが、フィ リピンでは、残念ながら農業部門が今でも一番立ち遅れており、最も貧しい部分 です。パンデミックは大きな災害ですが、それにより、「本来のノーマルな農業」 の確立という方向に政策が移行しつつあることは素晴らしいことです。私は、パ ンデミックを契機にした、農業政策の転換を高く評価します。

危機が「機会/チャンス」になるもう一つのフィリピンの事例は、資本主義を 見直す機会です。「シェア・ホルダー(株主)の価値よりステーク・ホルダー(株 主+アルファ)の価値を最大化せよ!」と叫びながら、フィリピン経営協会の企 業戦士たちが「繁栄の共有」をアピールする誓約書に署名しました。このアピー ルは、長年日本の企業経営を学んできた者にとっては新しいものではありません が、フィリピンにとっては革新的、画期的で心強い動きだと私は考えています。 それにフィリピンのスペイン系の財閥も連携していることは興味深いです。ある

⁹ https://www.searca.org/news/searca-ceo-rallies-economic-business-research-ard-during-healthcrisis



図2:フィリピン経営協会の宣言

財閥の会長は、「共有された繁栄は共有された災難という意味もある」と発言しました。(図2)

最後に、私が感じた大きな「危機が機会になる」事例は、フィリピンの学問を 見直す機会です。一流大学群だけでなく、2、3流の大学までがSDGsを優先す る大学の国際インパクトランキングに挑戦しています。このランキングは、大学 の社会貢献の取り組みを国連のSDGsの枠組みを使って可視化するものです。

今年、五つのフィリピンの大学がランキングに入りました。フィリピン大学の中の最上位はアテネオ・ド・マニラ大学です¹⁰。この大学はイエズス会系の大学であり、日本の上智大学と関係を持っています。

アテネオ大学長は「この(インパクトランキングの)結果は、アテネオ大学が、現実の世界に与えるインパクトという点で、世界の一流教育機関と肩を並べる存在であることを示した」、そして、「われわれは、これからも持続可能かつ公平、公正な世界の実現に向けて一層努力する」と宣言したのです¹¹。

以上のとおり、フィリピンではこの「危機を機会に転換する」兆しが現れています。危機を機会として新たな政策立案、政策の方向転換にチャレンジするというフィリピンの歩みは、危機対策としても有効ではないかと思います。

国連も対策を練っています。冒頭で言いましたように、国連事務総長はSDGs 実現のためのすべての試みにチャレンジするべきだと発言しましたが、これに

 $^{10 \}quad \text{https://ched.gov.ph/five-ph-universities-ranked-in-the-impact-rankings-tau-only-suc-in-worlds-best-universities/} \\$

¹¹ https://businessmirror.com.ph/2021/04/23/ateneo-leads-5-phl-universities-listed-in-2021-the-impact-rankings/

応えて、国連はSDGsの実現を加速させるため、SDGs PUSH政策を進めていま す。SDGs PUSHでは、特に次の四つの部門に焦点を当てています。統治、社会 保障、グリーン経済、IT革新です。下の図のように、SDGs PUSHの四つの要素 はSGRAフィリピンが推し進める持続可能的な共有型成長の理念、つまり効率 性、公平性、環境と補完的であると私は考えています (図3)。これからの対策 が成功するためには、世界のみんなと手を結んでさらなる努力をすることが必要 でしょう。

ご清聴ありがとうございました。

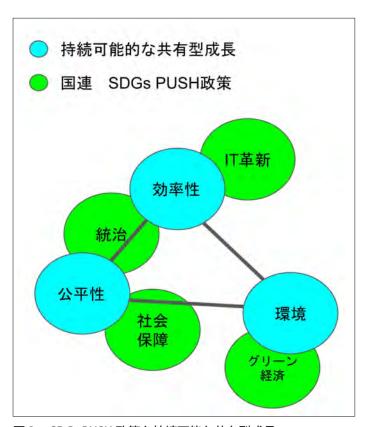


図3:SDGs PUSH 政策と持続可能な共有型成長

報告 2



ハンガリーにおけるSDGs

一水に関するハンガリー・中国の国際関係・協力を事例に一

杜世鑫

INAF

要旨

持続可能な開発目標(SDGs)は2015年9月の国連サミットで採択されて以来、グローバルの規範として世界各国に影響を与えている。その中で、達成度ランキング上位の国に、北欧や西欧、北米諸国のほか、東欧諸国もたくさんあるということは注目に値する。2021年のデータ(Sustainable Development Report 2021, Cambridge University Press)によると、チェコ(12位)、ポーランド(15位)は日本(18位)より上であり、ハンガリー(25位)も米国(32位)、中国(57位)を大きく上回っている。東欧諸国の多くは冷戦時代にソ連圏にあり、社会主義制度を採用していたが、冷戦の終焉とともに民主主義体制となり、一部はEU加盟国になっている。このような複雑な背景を持っている東欧諸国はなぜ国連目標の基準の中で、世界のGDPランキングトップスリーの日本、中国、米国を抜いたのか。実に興味深い現象である。

東欧諸国の中で、ハンガリーはアジア、特に日本や中国との連携が強いとされている。ヴィシェグラード4カ国(V4)の一員として日本との協力関係が強く、一帯一路(BRI)にも積極的に参加しており、新型コロナウイルスの感染拡大の中で、中国製のワクチンを多く採用している。ヨーロッパとアジアの中で、ハンガリーはいかに国際協力を通じて SDGs の基準を目指しているか、それが本報告の論点の一つである。

問題提起

こんにちは。杜世鑫と申します。まず、問題提起として、なぜハンガリーの SDGsの達成度が高いかということを考えたいと思います。SDGsの達成度ランキングの上位国には、北欧や西欧、北米諸国の他に、実は東欧諸国も多く、達成度が非常に高いのです。この点に注目すべきだと考えます。例えば、日本より達成度が高いポーランド、チェコを挙げることができます。ハンガリーの達成度も、アメリカや中国を大きく上回っているという事実があります。東欧諸国の多くは、冷戦時代において社会主義制度を採用して、冷戦の終焉とともに体制転換

を遂げましたが、なぜこのような複雑な背景を持っている東欧諸国は国連の目標 を達成する際に高い順位になったのか、これは非常に興味深い現象ではないかと 考えています。そこで、アジアと欧州の関係の中で、特に日本と中国と関係が強 いとされているハンガリーに焦点を当てて、ハンガリーはいかに国際協力を通じ てSDGsの基準を目指しているのかをご報告します。

ハンガリーのSDGsと水

なぜハンガリーはSDGsの水準が高いかを考える際に、水に注目する必要があ るのではないかと考えています。ハンガリーのSDGsの達成度のチャート(スラ イド1) を見ると、ゴール1、4、6、7、15は既に達成し、上昇志向にある ということですが、ただ、水分野の達成度は特別です。国連の報告によると、水 はハンガリーのSDGsにおいて決定的な役割を果たしている (playing a crucial role) ということです。

ちなみに、SDGsに関する水の基準とは何かというと、安全、安価、汚染の減 少、水不足への対処、そして、衛生、国際協力、コミュニティの支援などが挙げ られます。

そもそも、ハンガリーにとって、安全な水は非常に重要です。首都ブダペスト の真ん中を流れるドナウ川と川沿いのきれいな国会議事堂があります。また、日 本と同様、ハンガリーも温泉の国として有名です。さらに、ブダペストのど真ん 中に中央市場があり、いろいろな農産品が売られ、農業の国として有名です。農 業の国、温泉の国のハンガリーは、きれいな水がないとやっていけないと考えら れます。

なぜハンガリーはSDGsの水準が高いか —— 水に注目する必要がある。

なぜなら、水問題はハンガリーのSDGsにおいて決定的な役割を果たしたからである。

SDG Country	Hungary-Country score	Hungary-Regional Score	Goal Assessment	Goal Trend
Goal 1-No Poverty	98,97	98,85	Achieved	T
Goal 2-Zero Hunger	68.04	65,58	Major Challenges	4
Goal 3-Good Health & Well Being	84,46	91,28	Significant Challenges	,
Goal 4-Quality Education	94,25	98,10	Significant Challenges	91
Goal 5-Gender Equality	63,64	76,87	Significant Challenges	,
Goal 6-Clean Water & Sanitation	80,72	85,58	Challenges Remain	1
Goal 7-Affordable & Clean Energy	91,71	92,37	Significant Challenges	-
Goal 8-Decent Work & Economic Growth	83,16	82,19	Challenges Remain	T
Goal 9-Industry, Innevation & Infrastructure	62,99	81.28	Mosor Challenges	7
Goal 10-Reduced Inequalities	76,56	74,57	Challenges Remain	
Goal 11-Sustainable Cities & Communities	85,10	85,07	Challenges Remain	*
Goal 12-Responsible Consumption & Production	72,96	57,04	Significant Challenge's	
Goal 13-Climate Action	81,74	65,48	Major Challenges	ı
Goal 14-Life Below Water		59,34	arcy	
Goal 15-Life On Land	80,94	73,93	Achieved	1
Goal 16-Peace Justice & Strong Institutions	75,37	82,20	Significant Challenge's	4.
Goal 17-Partnerships for the Goals	38,78	61,58	Significant Challenges	1

達成度の上位を示す指標

ゴール(1): 貧困をなくそう

ゴール(4):質の高い教育をみんなに

ゴール⑥:安全な水とトイレを世界中に ゴール⑦:エネルギーをみんなにそして クリーンに

ゴール(5):陸の豊かさを守ろう

"The environmental pillar has always been the centre of the concept of sustainability in our country. Hungary holds the opinion that clean water supply and sanitation is one of the greatest concerns of the future of mankind, playing a crucial role in furthering sustainable development and peace". (United Nations, 2018)

Sustainable Development Solutions Network (2021)

スライド1

31

水に関するハンガリーのSDGsと国際協力

では、なぜハンガリーでは「安全な水」が実現できたのかということですが、 国際政治学の視点から見れば、それは地域協力が重視されたからだと考えています。この地域協力にはヨーロッパの域内協力と域外協力があり、域内協力は主に ドナウ川の地域協力です。私の同僚、ソアヴァパ・ガムプラムアンさんというタイの学者が、最近、羽場久美子先生が編著した『中欧・東欧文化事典』(丸善出版)にドナウ川地域協力について書きました。また、域外の協力においては、例えばアフリカとの連携や、アジアとの連携などが挙げられます。

アジアとの関係は、もちろん、ハンガリーと日本との関係は非常に緊密ですが、今回取り上げたのは中国です。中国は、重要な一員として役割を果たしてきたと言えると思います。佐渡友先生がご講演の中でおっしゃったように、2012年から2015年のSDGsの採択にかけて、国連の基準と規範が次から次へ進化してきました。それに伴って、ハンガリーと中国の環境に関する国際協力も進化してきました。具体的には、水セミナーの開催や水産業サミットの開催、フォーラムの開催などが挙げられます。

水に関するハンガリーのSDGsと中国

なぜ中国とハンガリーの国際協力が進められたかというと、中国の改革開放、 東ヨーロッパ諸国の体制転換、国際規範の伝播があげられます。ハンガリーも中国 も、国際社会の一員として認められたいという動機があったのではないかと考えて います。その結果、経済協力と環境協力が並行しているという結果になりました。 具体的には、三つの事例を挙げることができます。事例1(スライド2)は、

事例1:ハンガリー・中国水セミナー 2012 A magyar-kínai vízpolitikai és árvízvédelmi műhelyülés 中洪水管理検討会

行為主体:

ハンガリー地方開発省(Vidékfejlesztési Minisztérium)副長官 中国水利省(Ministry of Water Resources of the People's Republic of China)副 長官

アジェンダ:

グローバル気候変動問題、洪水、大雨、干ばつの問題などの管理と協力 水サミットの開催

主張:

ハンガリー側:ドナウマクロ戦略とEUとの連携を強調、リオサミット: 水問題においてハンガリーは主導的な役割を果たそうとする(Vezető szerepet kíván vállalni vízügyi kérdésekben)

中国側:洪水と干ばつの問題に取り組み、水資源を効率的に管理し、水供 給の安全性を高めること

https://2010-2014.kormany.hu roll.sohu.com/20120910/n352767081.shtm





スライド2

ハンガリー・中国水セミナー2012です。これは副大臣級の会合ですが、グロー バル気候変動問題、洪水、大雨、干ばつの問題が議論されています。実は、中国 にとっても水問題は大変重要な課題です。今年、私のふるさとの河南省では大き な洪水が起きて、世界中、そして日本でも報道されました。大雨、洪水は、中国 にとっては喫緊の問題です。そこで、ハンガリーからいい経験を学びたいという インセンティブがあります。

事例2 (スライド3) は、ハンガリー・中国水産業サミットです。局長級の会 合で、水関連の問題がいろいろと議論がされていました。

事例2:2019 ハンガリー・中国水産業サミット A magyar-kínai vízipari csúcstalálkozó 中洪水行業高層論壇

ハンガリー外務貿易省水外交局長 中国水利省首席経済学者(政府局長級)

アジェンダ:

水サミットの開催、ハンガリーと中国の水管理の課題、目的、解決策、お よび関連する環境対策と資金調達

主張:

ハンガリー側:ハンガリーの水管理は近隣諸国に大きく依存しているため、 ハンガリーはすべての国と二国間協定を締結し、約30の水管理に関する覚 書に署名。洪水、内水、干ばつの抑制と最新の方法など

中国側:1人当たりの水供給量は非常に少ない。このため、中国政府は、人 口増加や急速な経済発展に直面して、さまざまな対策の結果として絶えず 改善されている水の保護と安全を非常に重視している





https://www.bdl.hu/hirek/vizipari-forum-peking

スライド3

水サミット Water Summit 事例3 A Budapesti Víz Világtalálkozó

行為主体:国連、ハンガリー政府、各国政府、科学者、 市民社会、ビジネスマン等

経緯:

2013年、ブタペスト水サミット、ハンガリー・ブダペ ストで開催

2015年、SDGs採択

SDGsの成果の一環として、2016年、2019年に第二回 目、三回目が引き続き、ハンガリー・ブダペストで開

2016年より、中国水利省大臣が参加



www.nea.gov.cn/

スライド4

事例 4 2021年生態文明貴陽国際フォーラム Eco Forum Global Guiyang

行為主体

- 中国共産党中央政治局常務委員会(党の最高決定機関)
- 中国人民代表大会常務委員会 (国会)
- 各国首相レベル、大臣レベルの首脳(セルビア、フランス、タイ、 ハンガリーなど)、78か国が参加
- 中国外務省、水利省、地方の(副)省長(県知事)など
- 貴州省知事並べに省政府

NGO、研究機関など

★ハンガリー外務大臣 Szijjártó, Péter

パリ協定、脱炭素成果のアピール 水サミット成果の強調 水資源の保護と管理の重視





http://www.efglobal.org/ www.ddcpc.cn/detail/d_guizhou/

スライド5

事例 3 (スライド 4) は、国連が後押しした水サミットです。ブダペストで 2013年、2016年、2019年、3 回開催され、中国は第 2 回の 2016年から、水利省 の大臣が参加しています。

事例4(スライド5)は、最近の出来事ですが、中国で開催された2021年生態文明貴陽国際フォーラムで、中国の指導部が関与しており、なおかつ各国の重要な人物が参加したフォーラムです。ハンガリーから外務大臣のSzijjártó Péterさんが参加し、パリ協定、脱炭素成果のアピールや、水サミット成果の強調などが講演の中に盛り込まれていました。

まとめ

まとめです。水に関するハンガリー・中国の国際協力がハンガリーのSDGs達成促進の一因になったのではないかと考えています。この国際協力は、ヨーロッパ域内の協力と域外の協力があり、域内ではドナウ川地域協力が挙げられ、域外では中国との協力が非常に重要な役割を果たしたと言ってもいいだろうと思います。様々なセミナーやサミット、フォーラムが開催され、その結果、水対策の経験を交流することができ、ハンガリーが水の国際協力のハブ(中心)となったと言っても過言ではないかと思います。ハンガリーのSDGsにおける水の基準での成果が高く評価され、SDGsの達成も促進されたと考えています。

以上、私の報告でした。ご清聴どうもありがとうございました。

報告

「アラブ持続可能な開発レポート 2020」から読み解く 中東・北アフリカ地域の SDGsに向けた課題

ダルウィッシュ ホサム

アジア経済研究所、SGRA

中東・北アフリカ地域では、二つの世界大戦後に多くの国々が樹立・独立し、 20世紀初頭から半ばにかけて目覚ましい発展を遂げた。経済、教育、健康など の指標が大幅に改善し、1970年から2010年にかけての平均寿命の延び率は、 他のどの地域よりも高い。保健、教育、所得という三つの人間開発の側面に関 する達成度を測るための包括的な社会経済指標である人間開発指標(Human Development Index) も、同時期に65%増加している。中東・北アフリカ地域 の人々にとって、生活の多様な側面が大幅に改善したことは間違いない。

しかし、2020年の「アラブ持続可能な開発レポート」によれば、中東・北ア フリカ地域では、2030年までに持続可能な開発目標(SDGs)を達成できる国 はないと結論づけられている。同報告書では、SDGsの相関関係、SDGs達成の 主な障害、SDGsから取り残されるリスクの高い人々に焦点を当て、SDGsの 達成を促進するための重要なポイントを明らかにし、社会、経済、政治、文化 と環境における構造変化の必要性と、地域的な変革の重要性も示されている。

本報告では、「アラブ持続可能な開発レポート」の概要と主要な論点を紹介 し、中東・北アフリカ地域におけるSDGs達成の課題とCOVID-19の影響を考察 する。

皆さん、こんにちは。元渥美奨学生のダルウィッシュです。よろしくお願いし ます。現在は、アジア経済研究所で中東・北アフリカ地域の国際政治、主に中東 政治を中心に研究しています。本日は、「『アラブ持続可能な開発レポート2020』 から読み解く中東・北アフリカ地域のSDGsに向けた課題」というタイトルでお 話しします。

このレポートは、2020年に国連の西アジア経済社会委員会(ESCWA)がまと めたものです。アラブ地域がSDGs達成に向けてどのような道筋を通るかという 予測や、何が障害となっているかをそれぞれのSDGsごとに分析したレポートで

34

す。このレポートから、アラブ世界が直面する問題が浮かび上がっています。

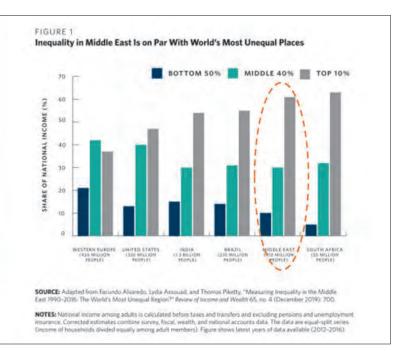
はじめに、中東・北アフリカ地域(MENA地域)が現在どのような状況に置かれているかをざっと見てみましょう。まず、この地域は皆さんもご存じのように、何度も悲惨な戦争や内戦を経験してきました。パレスチナ、シリア、イエメン、イラク、リビア、スーダンなど、戦争、紛争、混乱が長引いている国がたくさんあります。例えばシリアでは、人口の80%が戦争または紛争が原因で疲弊した生活を強いられています。イエメンでは、紛争で30年分の発展が失われたともいわれています。戦争・紛争が長期化することで、人間開発の可能性が奪われてしまっているのです。

また、レバノン、チュニジア、スーダンなどで顕著なように、国家が脆弱です。さらに、権威主義体制の国が多く、汚職がまん延し、説明責任が欠如しているという状況があります。また、政治犯として拘束されている人が何万人もいて、言論の自由がありません。内戦と国家の破綻により、武装勢力が広がり勢力を強めています。石油への依存もあります。経済が石油価格の変動にいつも影響されています。そして、地域大国のイラン、サウジアラビアや、アメリカ、ロシアといった国際的に影響力の強い国から絶えず介入を受けている地域でもあります。

世界で格差が最も大きなMENA地域

中東は、世界でも貧富の格差が最も大きい地域です。このグラフは、1990年から2016年のデータを基に国や地域の格差を示したものです(スライド1)。このグラフの点線で囲んだ "Middle East" のグループに北アフリカは含まれていませんが、中東は貧富の格差が最も大きい地域であることが分かります。また、グラフを見ると、中東の格差の広がりは、国単位でも最も格差が大きい南アフリ





スライド1

カやブラジルなどとほぼ同じです。中東では、地域全体の国民総所得を見ると、 トップ10%の人々が総所得の60%を独占しており、下から50%の人々の所得は 9%にしかなりません。中東では、石油収入が国の主な収入源であることも影響 しています。この石油収入は政治エリートに独占されていて、そのため富が一般 民衆に配分されず、ますます格差が広がってしまうのです。

重要な側面で遅れをとるMENA地域

国連の西アジア経済社会委員会がまとめた「アラブ持続可能な開発レポート 2020」は、SDGsの17のゴールを一つずつ取り上げ、ゴールを達成するための課 題や障害が何かを分析しています。このレポートの分析対象となっている「アラ ブ地域」は、北アフリカ、西アジア、アフリカの地域にある22の国です。この レポートでは、スライド2にあるような問題の解決に取り組まなければSDGsは 達成できないと結論付けています。

まず、高い失業率の問題があります。MENA地域の失業率は世界で最も高い レベルで、特に若者と女性の失業率が深刻です。また、COVID-19が広がる前か ら、世界で最も「極度の貧困 (extreme poverty)」が広がっている地域です。 エネルギー消費を見ると、再生可能エネルギーが地域のエネルギーに消費に占め る割合はたったの4.1%です。ノルウェーは約45%、ブラジルは約32%、ニュー ジーランドは約25%なので、これと比べるとかなり低いことが分かります。

また、難民や国内避難民も大量に発生しています。世界の難民と国内避難民 の半分以上は、中東・北アフリカ地域からです。また、軍事費を見てみると、 GDPの6.2%を武器の輸入に費やしています。これは世界でも最も高い割合で、 中東地域の武器輸入は世界全体の35%に上ります。また、研究や開発のための



スライド2

公的な財政支援もありません。それから、食料を見てみると、自給率はとても低く、食料の大部分を輸入しています。雇用の大部分は農業セクターが占めていますが、農業セクターがGDPに占める割合は7%だけです。また、女性の社会進出と政治参加は世界最低レベルです。

データと公共政策の課題

「アラブ持続可能な開発レポート2020」は、データと公共政策の重要性についても指摘しています。SDGsを達成するためのさまざまな課題の解決には、客観的なデータに基づく状況分析と取り組むべき問題の洗い出しが必要です。しかし、MENA地域にはジェンダー、年齢、収入といった基礎的なデータが欠如しているという根本的な問題があります。これらのデータは、SDGsに向けた取り組みの評価や効果的な政策を打ち出すための分析にも必要です。

SDGs には、17のゴールと232のインディケーターがあります。しかし、MENA 地域ではこのうち半数以下のインディケーターしか情報がアップデートされていません。その中でも2015年から情報がアップデートされていないものや、2000年以降、統計がとられていないものもあります。

さらに現在は、COVID-19の影響も考える必要があります。COVID-19の影響で、暴力と紛争、格差、失業、貧困、不十分な社会的セーフティネット、人権、国家機関の機能不全、脆弱な経済といった、元々地域的に存在していた問題がさらに深刻になっています。

効果的な政策の必要性 一地域の脆弱性に対処し解決策を探る

この難しい状況の中で、MENA地域がまず始めなければならないのは、貧困、経済成長、社会サービス、気候変動と環境、人権、効果的なガバナンスのメカニズム、協働のアプローチによる政策策定といった問題に取り組むことです。そうしなければ、SDGsの達成と、COVID-19、非生産的な経済、市民社会の収縮、研究と開発の軽視、紛争と混乱から回復することは難しいでしょう。MENA地域とその人々がSDGsの恩恵を受けられるようにするには、現在の道筋から方向転換することが必要です。2030年まで残り10年を切った中で、MENA地域の国々が取る政策や選択がSDGsの達成に向けて大きく影響します。かなり大幅な軌道修正や大胆な政策の変換をしない限り、残された10年でSDGsの達成に向けて前進することは難しいと思います。

私の報告は以上です。ご清聴ありがとうございました。



朝鮮民主主義人民共和国 (DPRK)における SDGsの取り組みと評価

李 鋼哲

北陸大学、SGRA、INAF

朝鮮民主主義人民共和国(以下、朝鮮)のSDGsに対する立場はどのような ものであるのかはあまり知られていない。2019年にウラジオストックで開催 された、「持続可能な開発目標に関する北東アジアのマルチステークホルダー フォーラム」に参加した朝鮮代表は、自国におけるSDGsの取り組みついて報 告した。本報告ではこの報告を基に、朝鮮におけるSDGsへの国家的な取り組 みについての概要と達成度について紹介する。

李鋼哲です。この報告は、元々はわれわれINAFの理事である朴在勲先生にお 願いしたのですが、都合が悪くなり、私が報告することに突如変わりました。ご 了承ください。

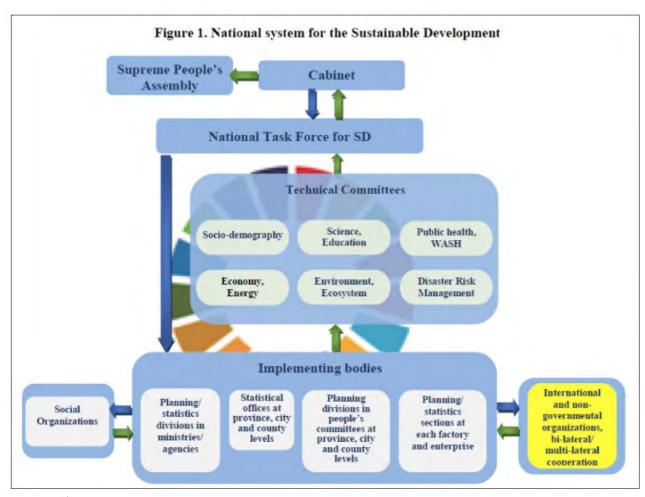
報告のテーマは、「朝鮮におけるSDGsの取り組みと評価」についてです。以 下、四つの問題についてご報告します。

1.政府のSDGsに対する基本認識と対応

一つ目は、政府のSDGsに対する基本認識と対応です。朝鮮政府も2015年9 月の国連総会でSDGs達成のために努力することを約束し、政府と住民がそのた め取り組むことを強調しています。

朝鮮では、2021年7月にVNRという自発的あるいは自主的国家レビューを初 めて国連に提出し、自国のSDGs進捗状況について報告しています。

朝鮮の政府の立場について若干説明します。 1 点目に、朝鮮は「国家経済発展 5カ年戦略」というものがあり、その5カ年計画とSDGsの目標はほぼ一致する ため、これを活用して進めるということです。 2点目に、重点分野を決めて進め ることにしています。3点目に、環境保護を大事にする、クリーン・エネルギー 開発に力を入れるということです。4点目に、外国との協力、南南協力を重視す



スライド1

ることを強調しています。5点目は、皆さんご存じのように、朝鮮は核ミサイル 開発発射実験によって国連から制裁を受けており、その制裁の中で、SDGsを実 現することは朝鮮にとっては非常に難しい点があることを彼らは強調し、制裁を 解除してほしいとうたっています。

朝鮮には、13の国連機関が常駐しており、朝鮮政府と国連機関が共同で「国連と朝鮮間の協力のための戦略計画2017-2021」を作成しています。これは「国連一朝鮮戦略計画2011-2015」の発展計画に続くものです。そして、2016年から2021年までの発展計画も作成し、それを進めることに力を入れています。その中で、次のような幾つかの課題を選択し重点的に取り組んでいます。

なぜなら、朝鮮は今、経済的に、食料的に非常に困難な状況にあるので、全ての項目に取り組むことは困難であるからです。2018年8月に、内閣府傘下に国家実行タスク・フォースを設置し、その下に六つの委員会を組成してます。例えば、SDGs 2の飢餓の撲滅、6の水と衛生、7のクリーン・エネルギー、11の持続可能な都市と居住地、13の気候変化への対応、15の陸地生態系などの目標に重点的に取り組んでいます。

この図はSDGs実現のための制度的環境整備(タスクフォース)の構図です (スライド1)。内閣府傘下にこのようなタスクフォースをつくり、その下に六つ の委員会を置き、各委員会がいろいろな取り組みを行っています。

2. SDGs 実現に向けての基礎的な条件と環境

報告の二つ目は、SDGs実現に向けての基礎的な条件と環境についてです。皆 さんもご存じだと思いますが、1990年代以降、ソ連東欧の崩壊と中国の市場経 済化によって、朝鮮経済は深刻な打撃を受けています。1994年以降は、自然災 害などでも打撃を受けて飢餓状態、餓死状態が常態化していました。2000年代 に入り、経済管理改善措置によって部分的には改善されますが、やはり根本的な 飢餓状態は改善されていません。それに2006年以降、核実験、ミサイル発射実 験で国際社会、国連から制裁を受けて、貿易が萎縮し、経済回復や成長が厳しい 状況に直面しています。

ここで言及したいのは、朝鮮政府と国際社会の信頼関係です。1991年9月に 南北朝鮮が同時に国連に加盟していますが、国連との付き合いは他の国に比べる とそれほど長くありません。そのような状況の中で、朝鮮は国連に対していろい ろな開発協力に、MDGsからSDGsまでに積極的に協力する意思を示しています が、国際社会から、あるいはアメリカからいろいろな制裁を受け困難に直面して いるということで、これを達成するためには「平和的な環境をつくらなければな らず、主権が尊重されるべきだ」ということを彼らは強調しています。

先ほどの杜さんの報告では、なぜ東欧社会はSDGs達成のランキングが高いの かというデータが示されました。皆さんご存じのように、朝鮮も社会主義の国で す。社会主義の国の社会システム、経済システムには特徴があります。朝鮮では 「四つの無」の社会制度になっています。税金なし、教育無料、医療無料、住宅 無料を一応実現しているので、資本主義国家あるいは一般の民主主義国家の福祉 とは違う次元の福祉社会をつくっています。そういうことを見た場合、一般発展 途上国と違う視点でこの評価をする必要があります。ロシアの朝鮮半島専門家の アンドレー・ランコブ教授が、「朝鮮は本当に第3世界国家なのか」という論評 をNK Newsに掲載しましたが、そのことについて説明しています。

ランコブ教授の話によると、朝鮮はGDPレベルで見ると最貧国グループに入 ります。1人当たりGDPは1,000~2,000ドルの間でいろいろな推計があります が、国連のHuman Development Index (HDI) で、ハイチやミャンマーなど同 じような所得グループと比べると、平均寿命はハイチが63.8歳、ミャンマーが 66.6歳に対して朝鮮は70.4歳です。文盲退治率で見ると、ハイチは61%、ミャン マーは93%であるのに対して朝鮮はほぼ100%で、つまり文盲はいないというこ とです。その他、総出産率などを見ても、先進国、中進国のレベルぐらいの社会 開発が実際にできているということです。そのような視点が非常に大事だと私は 思っています。

3. SDGs 目標達成に関する評価

報告の三つ目は、具体的なSDGs目標達成に関する評価です。2020年、国連で 発表されたSDSN報告書『持続可能な開発報告書2020』は、世界のいろいろな

SDGs 1.貧困撲滅	SCORE	Dash iboard	対前年進扬	年度
全体人口の中、1日1.90ドル以下の人口比率	40.1			
2030年に予想される上記人口の比率	31.2			
SDGs 2. 飢餓撲滅				
1. 栄養不足率	48.8		深刻	2017
2. 5歳以下発育不良率	27.9		深刻	2012
3.5歳以下栄養失調率	4.0		秀	2012
4. 成人肥満率 (BMI)	6.8			2016
5. 栄養レベル	2.1			2017
5. 穀物生産量 (T/ha)	4.0			2017
6. 持続可能な窒素管理指数	0.5		良好	2015

スライド2

SDGs 3. 健康と福祉			
1. 出産女性死亡率 (10万人当たり)	89		2017
2. 新生児死亡率 (千人当たり)	9.7		2017
3.5歳未満死亡率(千人当たり)	18.2		2017
4. 結核発病率 (10万人当たり)	513		2018
5. HIV持病率 (千人当たり)	N A		N A
6.30-70歳の心血疾患、癌、糖尿病、 慢性呼吸器疾患による死亡率(10万人当たり)	25.6		2016
7. 空気汚染による死亡率 (10万人当たり)	207		2016
8. 交通事故死亡率 (10万人当たり)	20.8		2013
9. 出産時の期待健康寿命 (年齢)	71.9	不十分	2016
10. 青少年出産率(15-19歳女性青少年、千 人当たり	0.3		2017
11. 熟練した専門医の下での出産率	100		2009
12. 幼児予防接種率	97		2018
13. 普遍的な健康保障カバー指数 (0-100)	71		2017
14. 主観的福祉 (1-10)	N A		

スライド3

データを集めてまとめたものです。それに基づいて朝鮮ではどのような状況になっているのかを、図で簡単に説明します。

スライド2~4は2020年のデータです。「SDGs 1.貧困撲滅」「SDGs 2.飢餓 撲滅」の二つの大きな指標の下の細かい指標を見ると、赤で示されている「全体 人口中、1日1.90ドル以下の人口比率」「2030年に予想される1日1.90ドル以下 の人口比率」「栄養不足率」「5歳以下発育不良率」など項目の達成度は良くな い、あるいは問題が深刻であるというものです。緑になっている所は優秀である ということで、「5歳以下栄養失調率」「成人肥満率 (BMI)」「栄養レベル」「穀 物生産量」は、先ほど申し上げた開発指標で見るとレベルが一般の発展途上国、 貧困国より高いということです(スライド2)。

「SDGs 3.健康と福祉」についても、左の方の1番から14番まで細かいデータ があります (スライド3)。

SDGs 4. 教育		
1. 小学校在学率	94	2009
2. 平均教育期間	N A	
3. 職字率 (18-24歳)	100	2008
SDGs 5. ジェンダー		
1. 避妊道具充足率	89.8	2014
2. 女性労働参加率	85.6	2019
3. 議会における女性の比率	17.6	2020

スライド4

「SDGs 4.教育」「SDGs 5.ジェンダー」については時間の関係で詳しく説明 できませんが、この色分けを見ると大体分かります(スライド4)。緑はよくで きている (識字率、避妊道具充足率、女性労働参加率)、赤はよくできていない (議会における女性の比率)、オレンジはまあまあよくできている(小学校在学 率)という状況です。グレーはデータなし(平均教育期間)です。そういう状況 に一応なっています。

4. 結論および今後の展望と課題

最後に総括です。以上で見てきたように、

- 1. SDGsは朝鮮の「国家経済発展5カ年戦略」を達成するための国際的なア プローチとして活用。
- 2. しかし、朝鮮はSDGs実行のための平和的環境醸成を強調しながら、国際 社会による制裁の不合理性を強調。
- 3. 国連の制裁による国際的経済活動が正常に行えない状況において、経済成 長が阻害されることで、SDGsの目標を達成する環境と条件はあまりにも不十分 だと思われる。
- 4. 朝鮮は発展途上国でありながら、一般発展途上国と違う社会主義体制であ るため、国連のSDG s 指標では十分評価できない特殊性を見落としてはいけな 11

結論として、朝鮮のSDGs 2030の実現は、現段階の朝鮮の政治経済情勢と国 際情勢からみると相当なチャレンジにならざるを得ないでしょう。

今の朝鮮の政治経済状況からすると、SDGs達成は非常に困難なのではない か。そして、COVID-19も発生しているので、先ほどの北アフリカ、中東と同じ ように達成が困難ではないかと私はみています。

以上で私の報告は終わります。ご清聴ありがとうございました。

報告 5

民主化プロセスと パンデミック

一歴史の運命のいたずらに翻弄される スーダン暫定政府と国民一

モハメド・オマル・アブディン

参天製薬(株)、SGRA

要旨

2019年4月に、30年間に及んだスーダンのバシール独裁体制が民衆蜂起によって崩壊した。民主化に向けて暫定政府が発足した半年後にパンデミックが猛威を振るい始め、スーダンにも第1波が到達した。第1波に対する政府の対応は早く、感染拡大の防止が可能となった。それに対し、第2波以降、政府は感染拡大を食い止めることができなかった。

本報告では、国境封鎖やロックダウンを含む厳しい非常事態宣言がスーダン 経済にどのような影響を与えたかについて解説するとともに、収入を保障でき ない貧困国における感染対策の難しさを明らかにする。

私はスーダンの話をいたします。なぜスーダンかというと、スーダンというのは先ほどダルウィッシュさんが説明してくださった、中東・北アフリカの一員でもありながらサブ・サハラ・アフリカの一員でもあります。両地域の一員であるということで、スーダンの事情を理解することによってアフリカ、あるいは中東地域の状況を少し思い浮かべていただけるのではないかと思うからです。

スーダンの現状

私は生(なま)の話をしたいと思っています。SDGsの目標というのは非常に素晴らしく、これに対して異論を唱える人は一人もいないと思います。しかし、スーダンが置かれている現状を見ると、SDGsの達成は残りの9年間では極めて難しいのではないかという、非常に悲観的な発言で話を始めたいと思います。

例を挙げます。スーダンの学齢期にある子どもたちは約700万人いますが、そのうち約300万人の子どもは一度も学校に通ったことがありません。これは学齢期人口の40%以上です。実は、2010年あたりでは約70%の子どもたちが学校に通っていましたが、今では40%までに後退しているのです。スーダンの度重な

る内戦、紛争などによってこのような状況になってしまったのです。

加えて、SDGsの大事な目標である sanitation、きれいな水、飲み水のアクセ スもそうです。約45%の国民しかきれいな水にアクセスできていません。電力 に関しては約35%しかアクセスできていません。スーダンはこういった状況に あるのです。

難しくなった経済の立て直し

スーダンでは2019年までは、30年間にわたり、バシールという大統領の独裁 政権が続いていました。彼は30年の間、例えばテロを支援して、皆さんご存じ のアルカイダのウサーマ・ビン・ラーディンを1990年代にかくまっていました (私の家から1kmしか離れていない所に住んでいました)。これによって米国の テロ支援国家のリストに載せられて、1997年から米国の経済制裁あるいは金融 制裁を受けました。そのせいで長年にわたりスーダンの経済が停滞していたので す。当然ながら、国際社会からも孤立してしまいました。

しかし、2019年4月に国民が立ち上がり、民衆蜂起でバシールを失脚に追い 込み、そして最終的には、軍が無血クーデターを起こしたことによって、軍出身 者と民主勢力のリーダーたちの合同の暫定政府ができました。そして民主化を目 指しましょうということになりましたが、それはなかなかうまくいっておらず、 両者の間で不和があり、政府が一枚岩となって、バシール体制下で破綻した経済 の立て直しをすることが非常に難しくなってしまいました。

加えて、スーダンに長く続いたこの体制が倒れたので、こういった体制が 二度と生まれないよう、民主化の支援と経済の復興に向けて国際社会から、 厚いサポートを受けるという約束がされていました。しかしながら2019年に COVID-19の到来、そして感染拡大により、先進国では自国の経済優先主義がま かり通るようになったため、残念ながらスーダンはこういった先進国からの経済 支援を受けることはできなくなってしまったのです。さらに、国際機関からの融 資などを得られるようにするために、まず自力で国内経済を立て直さなければな らない、という状況になってしまいました(※)。

SDGs目標達成以前

もう一つは、この長引く紛争により、近年、首都ハルツームを中心に、大都市 に地方から多くの人が流れ込んできて、街の外れにスラム街がどんどんできてき ました。

みんなどのような仕事をしているかというと、道端で水を売ったり、お茶を 作ったり、いわゆるその日暮らしをしています。インフォーマル・セクターで働 く人が圧倒的に多いのです。当然ながら、彼らは貯金もなければ生活のセーフ ティ・ネットが全くありません。

COVID-19の感染拡大が始まったとき、2020年3月にスーダンは厳しい国境封鎖とロックダウンをしてしまいました。それによって、最初は感染拡大を封じ込めることに成功しましたが、一方でインフォーマル・セクター、その日暮らしをしている人々にとっては、生計を立てるためのお金を得る手段が断たれてしまったのです。例えば、スーダンに遊びに行ったことがある方は分かると思いますが、道端にずらりといろいろな所でお茶を売っているおばちゃんがいますが、ほとんどがシングル・マザーであったりします。そこの人たちは、ロックダウンが適用されたりすると、収入が全くなくなってしまいます。

加えて、先ほど約300万人の子どもが学校に行けていないと言いましたが、2019年も不安定な年だったこともあり、また、2020年、2021年はCOVID-19感染拡大によって、子どもたちはほぼ3年間まともに学校に行けていないのです。こうした状況にあるスーダンでは、SDGs目標達成を議論するなどというよりも、停滞しどんどん低迷して行くこういった数字(経済)をどう食い止めるかという、非常に厳しい挑戦を受けているのです。

そのさなか、例えば学校をつくりましょうなどという、のんびりとした、従来のやり方での開発では到底間に合いません。今までの国際社会での議論では無理だと私は思います。

一つ希望としてあるのは、最近、若者たちがイニシアティブを取りながらイノベーションをしていることです。市民社会を中心に、例えばオンラインでクラスをやったり、クラスの様子をYouTubeにアップしたりしています。意外と思われると思いますが、スーダンはスマートフォンの普及率がとても高く、安価な中国製のスマートフォンを活用して、インターネット・アクセス率が非常に高いのです。そういったところで例えば情報にアクセスし、これまで地方の生産者はブローカーによって農産物を非常に安い値段で買いたたかれていたのですが、生産者と消費者をSNSでつなぐようなイノベーションを起こすことが可能になっています。デジタル・トランスフォーメーションによって、このような教育問題や経済問題などが解決されることが期待されています。

問題は山積みではありますが、今後、従来の経済開発の方法や大規模なインフラ投資では2030年を良い形で迎えることは到底期待できません。市民社会や若者のイノベーションがどこまでスーダンの社会問題、経済問題の解決に寄与するか、これからの状況を注視していきたいと思います。私の話は以上です。

※[編者注]

この報告が行われた第67回 SGRA フォーラム「誰一人取り残さない」は2021 年9月23日に開催されました。一方、スーダンでは10月25日にスーダン国軍がクーデターを決行し、首相をはじめ政府高官を拘束、それまでの暫定政府を解散しました。また、スーダンの治安部隊は、これに反対するデモ参加者に発砲し、多数の死傷者が出る惨事となりました。この報告で述べられている「現状」はこのクーデター以前の状況とご理解ください。

討論・総括 【第3部】

モデレーター: 李 鋼哲 (北陸大学、SGRA、INAF)

指定討論者:羽場 久美子 (神奈川大学教授·青山学院大学名誉教授、INAF)

三村 光弘 (環日本海経済研究所 (ERINA)、INAF)

パネリスト:報告者全員

括:平川均(名古屋大学名誉教授、SGRA、INAF) 総



指定討論

それでは、早速討論とフリー・ディスカッションに移らせていただきます。本日は、国連の2030年までに世界約200カ国が達成すべき目標という大きなテーマを、わずか2時間半で取り扱っているので駆け足のところがあり、本当は1日、2日でも議論しきれないところではありますが、皆さんしっかりと準備してコンパクトに、そして中身の濃い基調報告と各地域の報告をしていただき、ありがとうございます。

これからお話しいただくお二人の指定討論者はいずれもわれわれ東北亞未来構想研究所 (INAF) の重鎮理事です。お一人目の三村光弘先生は、今、新潟の環日本海経済研究所 (ERINA) の主任研究員です。専門は、主に朝鮮半島、特に北朝鮮です。もう 20 年以上研究しており、北朝鮮にも 30 回以上訪問していると思います。この分野の日本有数の専門家であり、今、北東アジア学会の会長も務めておられます。

お二人目は、羽場久美子先生です。国際政治、国際関係論が専門で、青山学院大学で教授をやっておられ、今年からは神奈川大学の教授として活躍されております。羽場先生も幅広くヨーロッパの研究、アメリカの研究から始めて、今、北東アジア、東アジアの研究をされており、世界的にも非常に有名な学者であり、世界国際関係学会(ISA)のアジア・太平洋地域の会長も務めておられます。

それでは、まず三村先生からよろしくお願いします。5分程度でコンパクトに まとめていただければ助かります。

ただ今ご紹介いただきました環日本海経済研究所 (ERINA) の三村と申します。今日は、私は別に朝鮮半島の話をするわけではなく、今日お話しいただいたこの SDGs の話に即して少しお話ししたいと思います。

まず、今日、佐渡友先生のお話を聞いていて、食卓の写 真が非常に印象的でした。土の付いた野菜や穀物がたくさんある国もあれば、箱

© 2022 SGRA

三村

に入った物がたくさんある国もあり、随分違うなと感じました。

この地球温暖化の話ですが、少なくとも政治的にはもう疑いようのない事実と いうところまでアップグレードされているということで、それを前提に動くと思 います。グレタ・トゥーンベリさんの話が出てきて、私は彼女が「How dare you!」 と言ったときに、やはり若い世代の怒りとしてはそうなのだろうなと思いました。 ただし、いわゆる先進国、G20の国、あるいはG8の国、G7 + ロシアぐらいの 国の中で見れば、彼女の言っていることはどちらかというとこれからの未来を嘱 望される若い人たちの叫びと見えるのかもしれませんが、これが国連加盟国全部 というレベルになると、先進国出身で、白人で、元々ヨーロッパの、スウェーデ ンは植民地主義がそんなにひどかったわけではありませんが、どちらかというと 「殺す」側の人の発言が、女性である、若い人であるという二つの割引はあっても、 世界の全ての人の心を捉えるかというと、私はそうではないのではないかと思い ます。

それに、「プーチンには怒っていたけれど習近平には怒っていなかった。イン ドや中国に対しては怒りをぶつけない。なぜだろう」というふうに、私は欧州が 全てではないと思っているので、そのように感じました。

でも、彼女の言ったことで重要なのは、「みんな金の話ばかりしている。けし からん」ということで、それはそうだと思います。この気候変動の話でいうと、 最近は気候変動の影響をヘッジするために、脱炭素社会をつくるために、各国の 中央銀行は QE をさらに膨らませ、ファンドをつくり、金もうけしましょうとい う話をしている。一体、世の中を良くするのか、金もうけするのか、どちらが大 事なのか、やはりこの欲というものをなかなか捨てられないのだなと私は感じて います。

「足るを知る」というのは、非常に難しいです。私は、この SDGs ができなけ ればいけない理由は、やはり一部の人が非常に強欲に「自分だけよければいい」 と考えてこの世界を運営してきたためだと思います。そういう意味では、西洋キ リスト教社会の病理と言ってもいいのかもしれませんが、あまり一般化しないこ とにしましょう。

日本の近江商人はこう言います。「商売は三方良し」だと。「売り手良し、買い 手良し、そして、世間良し」。ですから、お金もうけするのですが、それは自分 だけがもうかるのではなく、相手も喜び、そして世間全体も良くなる、こういっ た考え方、哲学をもう少し世界が持っていくと良くなるのではないかと思います。 そういう意味では、日本は G20 あるいは G7 に入っている先進国ではありますが、 ヨーロッパやアメリカの他の国とは違う立ち位置あるいは視点という、かなりユ ニークな立ち位置にあるのではないかと思います。

そういうことで言うと、日本は過去に、アジアで帝国主義的な拡張をして、特 に朝鮮半島や台湾で植民地支配をし、中国に侵略戦争を仕掛けたわけですが、そ ういうところの歴史的な清算を日本がしっかりとやることによって、日本がヨー ロッパの帝国主義の国とは違う、しっかりと自分たちの過去を反省し、世界の公 益、公(おおやけ)のために一肌脱ぐ国として世界に日本という存在を示してい けるようになったらいいなと、思います。これは私がいつも朝鮮半島研究を行い

ながら韓国や北朝鮮や中国との関係、あるいは台湾の関係でいつも思っていることです。日本はそれをやらなければ、世界の第三世界あるいは非同盟諸国というのでしょうか、そういう国々ともうまくやっていけるリーダー的な役割はできないのではないかと思います。

ただ、それができれば、私は日本というのはすごく面白いことがいろいろできる、世界にいろいろ発信でき、技術もいろいろあり、中国やアメリカなどいろいろな国と協力しながらやっていける可能性があるので、そういう意味では、もう一歩踏み出せれば日本は面白いことができると思っています。

今日いろいろお話しいただいて非常に勉強になりました。今後そういう話を少しずつ紹介して、私自身も考えをまたアップデートしていきたいと思います。ありがとうございました。

李 三村先生、素晴らしいコメントをありがとうございます。それでは引き続き、 神奈川大学の羽場久美子教授にコメントをお願いします。

羽場 皆さん、こんにちは。世界中からご参加されているかと 思います。画面上ですが皆さんとお会いできて、非常にあ りがたく思います。



私は、ご報告に対して、「誰一人取り残さない (leave no one behind)」というテーマに関連してコメントさせて

いただきたいと思います。先ほどご紹介にあずかりましたように、神奈川大学教授、青山学院大学名誉教授で、今、世界国際関係学会(ISA)のアジア・太平洋の会長をしております。また、グローバル国際関係研究所の所長もしております。本日は若い方々のご講演に、非常に感銘を受けました。

スライド1をご覧ください。国際政治における SDGs の重要性としては、現在、コロナ禍の下で国際社会が非常に緊張を増しており、特に東アジアでその緊張が高まっている中、米中対立、それからアフガニスタンからの米軍撤退とその混乱、

国際政治におけるSDGs の重要性 「誰一人取り残さない」Leave no one

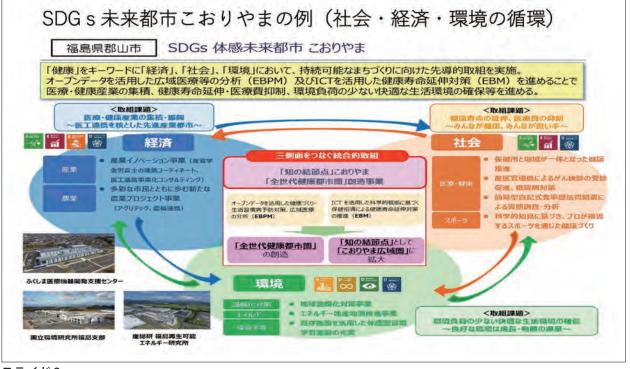
behind

- 現在、コロナ禍で、国際社会が緊張を増している。
- ・米中対立、アフガニスタンからの米軍の撤退と混乱
- テロの拡大、コロナ・貧困の拡大
- ・世界的な弱者に問題が集中:貧困、戦争、移民・難民
- コロナ、気候変動、CO2
- 今回のSDGsの重要性:「持続不可能な世界」をどう変えるか?
- ・ 先進国と企業が責任と問題点を自覚し、
- 問題解決に関わろう、関わらせようとしていること。
- 地球環境、気候変動、サステイナブルな発展のための
- 責任と課題を明確にした。極めて重要な会議といえる。

スライド1



スライド2



スライド3

さらにはテロの拡大、また、コロナ・貧困の拡大の中で、現在、世界的な弱者に 問題が集中しています。貧困、戦争、移民・難民問題、そして気候変動や CO2 の問題等々が非常に世界的な課題になっていますが、本日はそうした中で SDGs の重要性、特に佐渡友先生からは「持続不可能な世界」をどう変えるかというこ とで先進国と企業が責任と問題点を自覚し、問題解決に関わろう、関わらせよう としていること、そして地球環境や気候変動、サステイナブルな発展のための責 任と課題を明確にした点で、極めて重要な会議であったと思います。

特に、それぞれの若手の方々が、この17の項目(スライド2)の中で貧困、食料、 健康、教育、ジェンダー、環境問題、そして特に中東の方がパートナーシップ、 地域の協力のことを言われたことは非常に重要であったと思います。

御報告:各地域から

- 佐渡友先生 <先進国の責任>としてのSDGsの意識改革:
- 若者たちSGRAの卒業生:
- 特に、フィリピン、ハンガリー、シリア・中東、スーダン、朝鮮半島
- ・フィリピン:農業を見直す、貧困解決、
- ハンガリー:水、国際河川ドナウ川の重要性
- ・中東:地域協力の重要性:失業、貧困、難民、軍事費、女性:公共政策
- 北朝鮮:旧社会主義、
- ・スーダン: (達成目標困難)教育、水: 「民主化」
- ・まさに、紛争地域からいかに平和を作るか?地域ごとの課題:
- 「誰も取り残さない」という観点からの若い人たちの御報告、
- 大変勉強させて頂き、感銘を受けました。

スライド4

重要なこと(議論のたたき台)

- 1、私たち一人一人が「誰ひとり取り残さない」という自覚と責任を持ち、 自分たちの周りの<弱者・マイノリティ、ポトム>を思いやりながら、
- ・問題解決に向けての課題を考え、実行すること。
- 2 21世紀、22世紀を生きる<<mark>若者たち、子供たち、人間以外の生き物、</mark> 気候変動>のことも考えながら、今できることを長期的にやっていくこと。
- ・ 3. 地域の協力、人権の保護(特に旧来紹介されなかった地域について)
- 中東、東南アジア、東アジア、中央アフリカ等
- ・4. 日本、遅れている(地域の協力弱い。企業の制約改革困難)
- •: ex.プラスチック(有料化?):減少しない、他の国では紙に転換。
- ・日本、コロナ禍でも、大企業の内部留保は、10年で最大。
- 企業のCSRはなかなか進まない。
- ・まず<自分の国、自分の足元を、反省し、見直す。>若者の力、重要。
- <世界の貧しい国、大変な国、紛争地域のことを考え、共同する。>

スライド5

また、経済と社会と環境の問題に企業が取り組む責任があることを SDGs で明らかにしたことは極めて重要だったと思います。これは郡山の例です(スライド3)。日本の low の社会、下位の社会が、環境問題や、弱者をどうすくい込むかということで始めた仕事は非常に大きなものがあったと思います。

今日のご報告では、佐渡友先生が先進国としてのSDGsの意識改革をおっしゃってくださいました。若者たち、SGRAの卒業生の方々が、特にフィリピン、ハンガリー、中東を含むシリア、北朝鮮、スーダンというこれまであまり扱われなかった国々、そしてまさに紛争地域や世界的弱者の方々がいる地域から、いかに平和をつくるかということが打ち出されたこと、「誰一人取り残さない」という観点からの世界各国の若者たちのご報告は、大変勉強させていただき、感銘を受けました(スライド4)。ありがとうございました。

今日の議論のたたき台として挙げたい、重要なことが4点あります(スライド5)。

1点目は、私たち一人一人が「誰一人取り残さない」という自覚と責任を持っ て、自分たちの周りの弱者やマイノリティやボトムの人たちを思いやりながら問 題解決に向けての課題を考え、実行することが必要であるということです。

2点目は、21世紀や22世紀を生きる若者たちや子どもたち、そして人間以外 の生き物や地球環境としての気候変動のことも考えながら今できることを長期的 にやっていくということです。

3点目は、日本が苦手なことですが、世界の国家間、アジアの地域間の協力、 人権の保護です。特に旧来紹介されなかった地域に光を当てて、本日、スーダン や中東、シリア、ハンガリーや北朝鮮について、非常に詳細なご報告を頂いたこ とは非常に重要だったと思っています。

4点目は、自分の国、自分の足元を見直すことと、若者の力が重要であるとい うことです。日本は進んでいるのではなく、遅れているのではないかと私は思っ ています。地域、周辺国との協力が非常に弱いですし、また、企業の制約が困難 であるという問題があります。小さなことですが、プラスチックを有料化したと き、私は耳を疑ってしまいました。お金を2、3円や5円払うと、お金はプラス チックを大量放出している企業に行くわけです。プラスチックは全然減少しませ ん。他の国では、プラスチックから紙に転換しています。プラスチックを減らす ためにどうするかという企業の痛みなしにやれない問題を、企業の反省ではなく 消費者に還元するという問題は、日本の弱さではないかと思います。コロナ禍で 失業したり自殺したりする人たちが出ている中、大企業の内部留保はこの10年 毎年拡大し昨年は過去最大のお金がたまっている、苦しんでいる人たちにお金が 行き渡らず上に吸い上げられているという形で、企業の CSR がなかなか進んで いません。その意味では、われわれ一人一人が自分たちの国、自分たちの足元を 見直すことと、今日のように若者たちの力、各国の若者たちの力が極めて重要だ

大変勉強させていただきました。どうもありがとうございました。以上でござ います。

羽場先生、ありがとうございました。パワーポイント資料を使って、いろいろ な課題について、特に日本の課題についても分かりやすくご説明いただきました。 では、続いてフリー・ディスカッションに入ります。

自由討論

今のところまだ Q&A への質問が少ないこともあり、司会者の主導で進めていきます。われわれは、「誰一人取り残さない」ということが一つの響くキャッチ・フレーズですが、私の周りの事例で簡単に言います。

私のゼミ生の一人が、この9月に自殺しました。日本人ですが、家庭内のコミュニケーションがうまくいかず、追い込まれて自殺したということです。残念ながら、私は自分の周りで一人取り残しているので、非常に心から悔しい思い、悲しい思いをしております。

先ほど羽場先生もおっしゃいましたが、やはり日本もいろいろな面で遅れているところが見られるのです。先ほど、日本の役割について、三村先生からもいろいろなことができるのではないかと説明がありました。しかし、日本は1990年代にODAを約2兆円規模でやっていましたが、残念ながら今はだんだん減らして1兆円もいかないような状況になっているのです。もちろん、日本経済がうまくいっていないということもありますが、そのような現実があるわけです。ですから、われわれは一応みんな日本語で日本をベースにこの会議をやっているので、先進国自体の内部の問題と、先進国と途上国の関係の問題で、日本は手を差し伸べるべきことに政府としてきちんと取り組んでいないのではないかと。三村先生の希望は素晴らしいですが、今、政府はそれに対する対応がきちんとできていないという現実があります。それは一つ問題点として皆さんと一緒に考えていただきたいと思います。

これから残りの時間では、基調講演者と報告者を含めて、時間が非常にコンパクトなので、言いきれなかったことや補足があれば手を挙げて1人2~3分以内で発言していただいたり、あるいはパネルの間でお互いに質問したりすることもぜひ検討していただきたいと思います。討論者も含めて質問などがあれば、よろしくお願いします。

それでは、佐渡友先生から始めましょうか。何か補足したいことや、今気付い たことをお願いします。

佐渡友

私が今、SDGs の理念の中で注目しているのは、全員参加ということです。もうこれは政府や国際機関だけに任せられない、自治体も企業も個人も NPO・NGO も、みんなが頑張るということだと思います。それについては、日本ではかなり浸透してきたと思っています。初め 2015 年から 1~2 年は、ほとんどSDGs の普及がなく、外務省はかなり税金を使っていろいろな宣伝をしました。ピコ太郎まで国連に連れていってビデオを撮り、国内でテレビに流したりしていました。今や毎日のように日経新聞には SDGs の文字が出てきますし、いろいろ

なフォーラムも企画されています。SDGs 関係のテレビ番組も見られるようにな りました。自治体のホームページはどこも、SDGs の達成のためにどのような政 策をするかが掲載されていて、図表を使って詳しく説明されています。

企業、特に大企業は今、SDGs を達成しなければ自分たちの生き残りを図れな いという大変緊張した思いでいると思います。例えば、熱帯雨林を破壊するプラ ンテーションのことを私は紹介しましたが、花王の前の社長は、数年前にインド ネシアの奥地を歩いたそうです。自分の会社が輸入するパーム油のプランテー ションのほぼ80%は現地を把握しているそうですが、あと20%の生産地が把握 できていないというのが理由です。確認できていない小規模のパームヤシ畑がど んなふうになっているか、誰が働いて、どんな環境なのかということを確認する ために出掛けたのです。つまり、企業はもう自分たちが使っている原材料がどの 国で作られて、どんな人が作っているかも調べなければいけなくなっているとい うことです。これは SDGs の目標 12 の「持続可能な消費と生産のパターンを」 に当たります。大企業はみんなこのような傾向にあります。これは単なるアリバ イづくりだけではなく、非常に真剣にやっているということです。

そして今、中小規模の企業がそういう波を浴びています。しかし実際には会社 にどのように SDGs を取り込んだらよいか、わからない企業が多いようです。私 はたまたま経営コンサルタントの友人に頼まれて、中小規模の企業でどのような 意識改革が必要か、どのような「わが社の SDGs 宣言」を作成するかについて、 アドバイスをする機会があります。そのようなときにはワークショップを実施し、 社員一人一人が SDGs の目標達成を「自分ごと」として自覚することを重要視し ています。経営者によるトップダウンは有効ではないと考えるからです。

最近の新聞社のアンケートによると、日本国民の71%がSDGs に関心がある ことに「はい」と答え、29%は「いいえ」と答えています。また「SDGs は企業 が勝手に使っている言葉で、ただ利用してもうけているのではないかし、「文明は 本来こういうことはやっているんだ。だから、解決できない問題だ」と悲観的な 人もいました。関心がある人の中では、気候変動・温暖化が一番の関心事でした。 私がここでお聞きしたいのは、各国の一般の人の意識はどう変わっているかと いうことです。政府やエリートレベルではなく、一般の人が SDGs をどのよう に認識しているかについて知りたいのです。他国と比較して日本では一般的に SDGs の認知度は高い方ではないかと私は感じます。世界でどうなのかというこ とをぜひ聞かせていただきたいと思います。

佐渡友先生、どうもありがとうございます。私がいろいろ調べたところでは、 日本でも SDGs の宣伝・広報なども含めて、やはり知らない人が多いですね。先 進国でありながら遅れているのが問題ではないかと私は感じます。

次は、順番としてはマキト先生から何か補足やコメント、質問などありました らお願いします。

この質問はなかなか考えさせられました。それについて答えだけ簡単にお話し マキト します。私は、このコロナ禍で、人間の移動に制限がかかっているので、やっと

われわれの母なる自然が一息できるのではないか、環境が少し休めるのではない かと思っていましたが、間違っていました。先ほども出した統計を見ると、CO2 の排出量はコロナ禍の中でもまた上昇しているのです。だから、環境を守るため には革命が必要です。佐渡友先生もおっしゃったように、意識が変わらなければ いけないと思います。このままでは駄目だと思います。簡単ですが、以上です。

ありがとうございます。やはり観光を発展させると、先ほど佐渡友先生の報告 にもありましたが、かなりごみが残されたりします。私が15年前に総合研究開 発機構(NIRA)にいたときも、韓国、中国とエコ・ツーリズムに関する研究プ ロジェクトを進めたことがあり、そういうことを進めれば観光などに伴う環境破 壊は防げるのではないかということで、各国に政策提言したこともあります。こ れを世界レベルで全部進めるには、佐渡友先生がおっしゃっているように、意識 をどうやって変えるのかということが非常に大きな課題なので、やはり時間をか けていろいろ取り組まなければいけないのではないかと思います。

では次は、杜先生から何か補足したいことやコメント、質問があればお願いし ます。

杜 李先生、どうもありがとうございます。そして、討論してくださった三村先生 と羽場先生、どうもありがとうございました。

補足になるかどうか分かりませんが、ハンガリーの事例を勉強していると、国 と地域がどのように連携して、自らの強みを発揮して SDGs を達成するかという ことが非常に大事だと考えるようになりました。ハンガリーの事例では、ハンガ リーは水に恵まれた国なので、水に力を入れています。日本もハンガリーのよう に水がとても豊富で、きれいな国なので、水の分野でいろいろな取り組みも可能 なのではないかと思います。水の国際協力に関して、中国の場合は水への対策が まだ発展途上なので、水の分野で日中協力や、日韓との協力など、いろいろな国 際的な取り組みができるのではないかと思います。

そして、佐渡友先生が先ほど提起された、全員参加という論点は、非常に重要だ と思います。私の報告では、主に政府レベルを中心に話しましたが、実はハンガリー では、やはり企業と市民社会が SDGs に非常に貢献しているという現実があります。 ハンガリーでは、日本の経団連のような企業の連合体もあり、いろいろな取り組 みがあります。「全員参加」というのは非常に重要だと実感いたしました。

杜先生、どうもありがとうございます。ハンガリーでは市民レベル、あるいは 企業連合体のレベルで取り組んでいるということを紹介されました。

> それでは、次にダルウィッシュ ホサム先生から何か補足やコメント、あるい は質問はありますか。

ダルウィッシュ

今日はありがとうございました。今日、私が報告した「アラブ持続可能な開発 レポート 2020」の中心的なメッセージは、MENA 地域の国々が開発に対するア プローチを改める必要があるというものです。それぞれの国の政府がアプローチ

を改めれば、MENA 地域の 4 億人以上の人々が SDGs から恩恵を受けることが できるとレポートは締めくくっています。ただ、私はやはり政治学をやっている ので、政治面から見ると、核心的な問題は MENA 地域のほとんどの国が体制の 安定と権力の維持を優先し、国と社会の発展をないがしろにしているということ です。これを変えるためには、やはり政治も変えなければいけないということが 大きな問題です。今、MENA 地域の支配エリートたちは本当に自分のことだけ を考えているので、逆に国と社会を発展させないようにしているのではないかと 思います。これを変えるためには、やはり平和的な手段と方法で政権交代を可能 にするメカニズムが必要です。別に私は「民主主義、民主主義」と言っているわ けではないですが、支配エリートたちは平和的に政権交代できない構造になって います。このため、国と社会についてあまり考えることはなく、本当に自分たち の権力の維持のみを考えています。それによって格差が広がっていて、環境問題 も社会的な問題としてとらえられているわけではないので、政治面から考える必 要があるのではないかと思いました。

どうもありがとうございました。非常にいい論点を提起されました。この問題 は本当に大きな問題です。権力者が恣意的に国家を操り、自分たちの私腹を肥や すことになってはいけないということですが、これは50年間、100年間の大き な問題かもしれませんけれども、成果がなかなか出てきません。

先ほどの質問について、朝鮮で一般住民や企業は SDGs にどのように取り組ん でいるのかに関しては、すみません、情報収集が足りなくて報告できませんが、 政府が本気で取り組んでいたら、企業はほとんど国有企業なので、上からこうい うことをやりましょうと指示されればできることです。住民の教育レベルも非常 に高いので、重要性をきちんと説明すれば、大きく進むのではないかと私は思い ます。その辺で三村先生からもし何かありましたら、補足していただけますか。

三村 北朝鮮の場合は、中東の国と同じような権威主義というか全体主義の問題もあ りますが、アメリカと今対立していて制裁下にあることもあり、本当に純粋に経 済的な問題だけで国家の政策を運営しているのではないというところがあると思 います。それでいろいろ引っ掛かるところはありますが、それでもやはり国民生 活を良くするためにどうしたらいいかという視点を持つようになり、あのような ボランタリー・ナショナル・レポートを出すようになったのは大きな変化です。 今後、国際社会が、このような形で北朝鮮が変わろうとしていることを積極的に 評価して、それが自分の国の政権の強化に役立つと指導者が考えたら、恐らくこ ういう方針、方向性を維持するのではないでしょうか。これは国内の国民のため の施策であるとともに、自分たちの政権の正当性を高めるものであると認識させ るということになるのではないかと思います。

ありがとうございます。さっきのダルウィッシュ先生の補足で出た問題ですが、 やはり政治の問題です。国際政治専門の羽場先生から、この問題をどのように考 えて、どのようにすべきか、ということがあれば、ぜひよろしくお願いします。

56

- 羽場 先ほどコメントでもふれましたが、政治面から考える、ということはとても重要だと思います。今、シリアや中東や中央アジアの問題に大変関心を持っていて、そこにおけるアメリカなど先進国の役割とその国の政府、さらにダルウィッシュさんがおっしゃったようなその国の市民社会、市民の動向の三つをきちんと見ていかなければならないのではないかと思いました。ですから、その政府や、その政府と結んだ企業がいかに形式的に SDGs をやっても、実際には国民の貧困や国民の人権の問題に手を触れずに済ませるところがあるかもしれないので、政府レベル、企業レベルでやることはとても重要ですが、それも合わせながら、「誰ひとり取り残さない」という姿勢を文字通り実行していくためには、市民社会の声をきちんと反映していくことが極めて大事ではないかと思いました。ぜひ国連や若者の力で実行に向け頑張っていただきたいと思います。とても素晴らしいご報告をありがとうございました。
- 李 ありがとうございます。今、順番を少しずらしました。今の話と関連して、 SGRA メンバーの羅仁淑先生から、「社会主義体制の国は、同じような経済発展 レベルでも SDGs や HDI レベルで割とうまく取り組んだのだとしたら、これからの世界は社会主義を目指すべきではないのか」という質問があります。この問題についてまたお二人のコメンテーターにお願いしたいのですが、三村先生、何 かコメントいただければありがたいです。
- 三村 これは元々その国がどのような体制を採っているかによって違うと思います。 例えば社会主義ではない国を社会主義にするということであると、また別の面で 弊害が出てくるので、そこはやはり、今ある体制の中でどういう最善の結果を得られるかを考えた方がいいのではないかと思います。
- 李 ありがとうございます。羽場先生はこの問題をどのようにお考えでしょうか。 体制問題を。
- 羽場 社会主義の理念は、より根源的な意味で、ソサエティ(社会)や、ソーシャル (市民社会的) なところを大切にするという点では、SDGs とすごく結び付いていると思います。これまでの現存する社会主義体制は専制主義的な体制が強調されてきましたが、ダルウィッシュさんがおっしゃったような市民や国民を大切にしていく社会を民衆の中からつくっていくという点では、北朝鮮やロシアのような社会主義ではなく、羅先生の言われるような、国民を重視し人権を重視する国連型の社会、ソーシャルな社会主義的な社会をつくっていくことは極めて重要なのだと思います。
- 季 ありがとうございます。もう一つ質問があります。「スーダンや朝鮮のような発展途上国は国際社会で米国、先進国から制裁を受けています。こういう状況の中で、経済発展と環境保護のバランスをどう取ればいいのですか」ということで、最後の報告者であるアブディンさんからこの答えも含めて補足をお願いできますか。

アブディン

難しい質問です。最初に佐渡友先生から、SDGs の素晴らしいところは、国家を 超えて、国家、企業、市民社会、自治体、NGO などが取り組むことだというお話 がありました。国連というのは元々国家をベースとした組織なので、こういった大 きい枠組みは目新しいということですが、そうであれば、それぞれの地域が抱えて いる問題は、その地域固有の問題ではなく、全人類的な課題であるという認識がど こまでできているのか。できているのであれば、その課題の解決に対してどこまで 国際社会が貢献できるのか。みんなで特定の国の問題を解決するという合意につい て、その国家主権という観点から見れば、国際社会は SDGs を使ってどこまで国家 固有の主権に介入していくかという問題になるのではないかと思います。

開発途上国は、これからどのような経済開発のシナリオをつくっていくかによ りますが、ご承知のように先進国には非常に汚い経済開発の物語があって、その 上で今の経済成長が成り立っているわけです。開発途上国はその汚い経済開発、 すなわち環境破壊を踏み台とした経済開発をしない代わりに、国際社会は、どの ようなサポートをしてくれるのか。例えばクリーンな技術の移転、経済支援など、 いわゆる全人類的課題を口先だけでなく共に解決していく決意があるのか。これ は、大きな課題です。

もう一つ訴えたいのは、経済制裁の弊害を一般の人々が被るという点で、道義 的観点から見て経済制裁をどこまで許すべきか、許容すべきか、という問いかけ です。実は、経済制裁というのは、「ほのめかすこと」に意味があります。実際 に経済制裁をやってしまうと効果は期待できず、体制の態度は変わらないことは よく知られています。キューバや北朝鮮、スーダン、イランも含めて、ほのめか せば、もしかすると相手は態度を改めるかもしれません。実際にやってしまった ら逆に変わらないということが分かっているのにアメリカは経済制裁をどんどん 適用していく。こうした状況に対して、世界はノーと言えないのでしょうか。

環境破壊といえば、トランプ政権がパリ協定から離脱しています。皆さんが 2015年に、2030年までの目標を設定して計画を立てていますが、一つの力を結 集して進んで行くという前提がなくなっています。パリ協定に関してもアメリカ が脱退している中で SDGs をどこまで推進していけるのでしょうか。私は非常に 懐疑的な見方をしています。

李 アブディン先生は貴重な重要な視点を二つ提起されました。一つは先進国と発 展途上国の関係です。先進国が先ほど言ったような発展モデルで環境破壊してお いて、今、発展途上国にいろいろなプレッシャーをかけることはアンフェアだと いう観点だと思います。先進国と発展途上国の調整がどうなされるのかという問 題は非常に重要です。

もう一つは、アメリカを中心として他の国にどんどん経済制裁をかける、結局 何も効果はないのに、勝手に自分の利益のためにやる、こういう状況を改善しな ければいけないということです。しかし、国連社会ではアメリカにノーと言えな い国が多いので、これが今、SDGs を実現する上で大きな弊害になるのではない かと思います。

58

最後に、「温暖化問題など自然破壊について楽観的に考えたいですが、悪い方で想定した方がいいですか」という三村先生に対する質問があります。時間の関係で手短にお願いします。

■ 三村 こればかりは予想ができないと思います。ただ、やはりかなり悪いことを予想してやっていく必要があるのではないかと思います。これは先進国でも、日本でもそういうことは起こっています。先ほどもおっしゃった、汚い発展過程を経てきた先進国がどれだけ発展途上国に対してそれをやめろと言えるのかという道義的な問題から言うと、私は発展途上国にそれをするなと言うことは悪いと思っているので、成長のために必要な石炭火力などさえやめろと言うような極端な政策を提案することはやはりできません。技術的な対応では上手くいかない事態に備え悪い方向に考えつつ、政治的な面ではそれはある程度リスクを取る必要があるのではないかと思います。

李 ありがとうございます。時間になりましたので、これでパネル・ディスカッションを終わらせていただきます。報告者、パネリスト、質問をくださった方々に厚く御礼申し上げます。

ここからは、バトンタッチしてミヤさんに最後の締めの司会をお願いします。 どうもありがとうございました。

ミヤ 皆さま、長時間にわたるご報告とご討論、ありがとうございました。実体験、そしてなかなか聞けない現場に基づく貴重な講演と議論は非常に興味深いです。 SDGs にはさまざまな問題が含まれていますが、私はインドネシア人として、どうしても自分の国の状況を考えます。私が懸念している問題は、今後、インドネシアは森林が広い地域に首都移転する計画があり、これが環境破壊にならないかということです。今日のお話を聞いて、SDGs を目指して新しい動きがさまざまな国でなされていますが、参考にできるものもあるのではないかと私は考えています。

それでは最後に、今回のフォーラムの締めくくりとして、名古屋大学名誉教授の平川均先生に総括と閉会のご挨拶をお願いします。

総 括

平川です。SGRAメンバーで渥美財団の理事、それか ら新しくできました東北亞未来構想研究所(INAF)の理 事長と言うと名前に押しつぶされそうですが、理事長とい うことになっております。

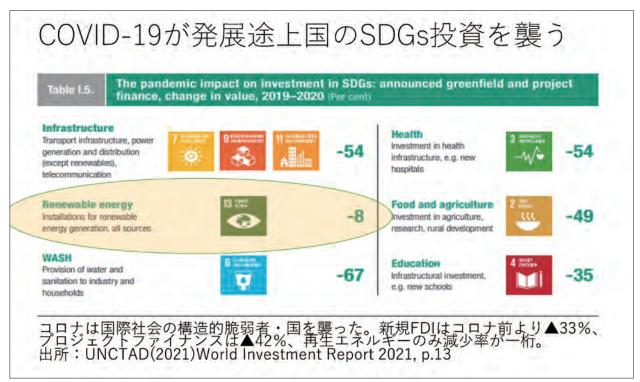
さて本題です。今日の SGRA フォーラムの最後に皆さ んと共有できないかと思って整理した資料がありますの で、総括の時間を少しいただいてご説明したいと思いま



す。まず、日本の SDGs について強調したいのは、私たちがグローバルな視野の 中で2030年のゴールに向かって、改めて自らの「想像力」と「共感力」を育て る姿勢が求められているのではないかということです。普段、聴くことのない世 界各地の SDGs のご報告を聴かせていただきながら、単なる流行に終わらせない ためにやはりそう思うのです。

それでは適宜スライドを示しながら説明させていただきます。

最初に、昨年 JICA の月刊誌「mundi」(8月号)には SDGs の達成に関わって、 「Sustainable Development Report 2020」からの高所得国と低所得国のグループ 別達成スコアが載せられています。それをみると、SDGs の達成スコアは、低所



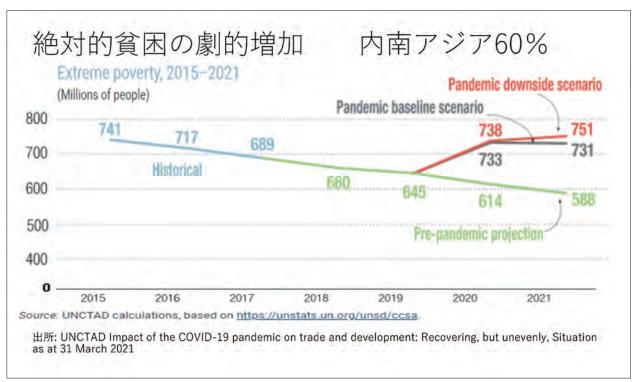
スライド1

得国でとりわけ遅れが目立ちます。とくに達成で困難の伴う目標が二つあります。一つは第1の目標の貧困削減、もう一つは第9の目標のネット環境の整備です。SDGs は21世紀に向けて国連が目指した MDGs(Millennium Development Goals)を引き継いだ活動と思いますが、発展途上国ではその最重要な貧困削減の目標と、もう一つ現在急速に進んでいるデジタル社会に向けての社会経済基盤の整備の二つの目標が大きく遅れているということです。ところがこれらの国では、第13番目の気候変動対策や第12番目の作る責任・使う責任の目標では高い達成度となっています。貧しい国の人々は身近なところで様々な試みを実践していることが分かります。「誰一人取り残さない」の目標の達成に向けて、日本にいて私たちはSDGsをどう理解して、国際社会とどう協力して行けばいいのでしょうか。

発展途上国は COVID-19 で大打撃を受けているということが、UNCTAD の最新の報告書で伝えられています(スライド1)。水や衛生関連(WASH)はマイナス(▲) 67%、インフラストラクチャー投資と健康関連はともに▲ 54%で、コロナによって全ての目標で必要な投資が激減しています。唯一、打撃が少ないのは再生可能エネルギーですが、それでも▲ 8%となっています。

実際、SDGsで一番期待されたのは貧困削減です。2015年のSDGsの開始時から見ると、絶対的貧困者数は7億4100万人から2019年には6億4500万人に減ったわけですが、コロナ危機で2020年には7億3800万人に増えてしまいました。2021年は7億5100万人にさらに増えると推計されています。1億何千万もの人々が新たに絶対的貧困層に転落したのです。これはちょうど振り出しに戻ったということになります(スライド2)。

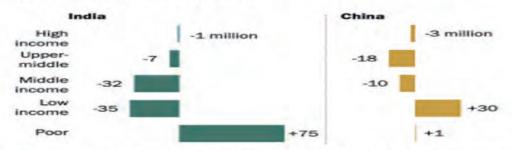
この実態を貧困削減がコロナで大きな影響を受けているインドと、中国で比較



スライド2

India is estimated to have seen a greater decrease in the middle class and a much sharper rise in poverty than China in the COVID-19 downturn

Estimated change in the number of people in each income tier due to the global recession in 2020, in millions



on \$2.01-\$10, middle income or \$10.01-\$20, upper-middle income on \$20.01-\$50, and high income on more than \$50; ed in 2011 purchasing power parities in 2011 prices. The estimates show the figures expre difference in the number of people in an income tier based on pre-pandemic projections and post-pandemic estimates. The term "post-pandemic" refers to the period since the onset of the pandemic in January 2020. It is assumed there is no change in the income distribution from the benchmark year for the projection to 2020. Source: Pew Research Center analysis of the World Bank's PovcalNet database.

- インドでは劇的な貧困化
- 出所: Pew Research Center

スライド3

しますと、インドのとりわけ深刻さが分かります(スライド3)。7500万人が新 たに絶対的貧困層に転落しました。その上位のすべての層でも大きな減少がみら れます。つまり転落がみられるのです。インドはCOVID-19で社会全体の貧困 化が進んでいるということになります。

では日本についてみてみましょう。日本では SDGs について最近は政府や企業 などにより様々なイベントが打たれていて、社会への普及に向けて取り組みがな されています。最近の経済新聞を見ただけでも催しの一面広告の掲載がいくつも ありました。これには気になることがあります。例えば、これらの全面広告の催 しのひとつは「SDGs の先 豊かさ実感へ英知集結」と銘打たれています。コロ ナ禍の発展途上国の人々は、この日本の新聞紙上の全面広告が SDGs の催しだと 知ったらどう思うのでしょうか。つまり、発展途上地域と日本で目指されている SDGs に込められた目標には大きな認識のギャップ、あるいはズレがあるのでは ないかということです。社会環境が異なれば課題も異なりますからズレは当然起 こるでしょう。しかし、コロナ禍にあって発展途上国の多くの人は、私たちには 想像が難しいような貧困と緊張関係の中で日々の生活のために闘っている、そう いう人々が数えきれないほどいるのではないかと思います。気候変動、温暖化な どの課題はもちろん貧しい人々も他人事ではありません。同時に SDGs の目標に は、国際社会の貧困や健康、福祉、安全な環境などを達成することも目標となっ ています。これはグテーレス国連事務総長がコロナ危機勃発直前に語った 2020 年の年頭の言葉ですが、「SDGs があるべき姿からほど遠く、目標を達成する軌 道に乗っていない。」だからこそ、20年代を「行動の10年」とするのだと。でも、 そのすぐ後に、コロナ感染症危機が襲ってきたのです。

COVID-19 について、グテーレス国連事務総長は次のようにも言っています。「ワクチン接種はグローバル社会の道徳が試されている」、そして、「紛争や不安定な状況下の人々は、取り残されるリスクがある」。テドロス WHO 事務局長は、「ブースター接種を一時的にやめて、そしてワクチンの配分されない所にぜひ配分してほしい」と言っています。

もう一度私たちは、新しいスタート地点に立って、SDGs を達成するために努力する。私たちがグローバルなレベルで、さらなる想像力と共感力を高めることが求められているということだと思うのです。

最後になりますが、佐渡友先生の基調報告は、日本の企業や市民の SDGs へ の取組みとその背後にある本質的視点をご講演いただきました。マキト先生の報 告からは、フィリピンの人々がコロナ禍にあって新しい道を切り拓いていること が伝えられました。SDGs を通じて人々が社会の在り方を見つめ直そうとしてい ることが分かりました。杜先生のハンガリーの報告は非常に興味深く、SDGs と 国際協力の重要性が具体的事例をもって示されたように思いました。ダルウィッ シュ先生は「アラブ持続可能な開発レポート 2020」を用いて中東・北アフリカ 地域の直面する大きな課題をお話しくださいました。そうでなくても中東・北 アフリカは大変な困難な中にあるのですが、そこに COVID-19 が襲ったのです。 李鋼哲先生は、皆さんも同じではないかと思うのですが、私にはまったく知らな い事実でした。そこからの SDGs の可能性の指摘は私たちが理解すべき課題の提 起だったように思います。アブディン先生のアフリカ・スーダンのお話は、日本 にいる私たちのおそらく99%が聞いたことのない、具体的な貧困に関わるショッ キングなものでした。私たちに SDGs で考えるべきことの問題提起として受け止 めねばなりません。SDGs の正に本質を突くものと感じました。同じ視点はダル ウィッシュ先生にも共有されていたように思います。

三村先生と羽場先生も加わっていただいた討議は、司会の李先生の上手い運びもあって議論がだんだんと熱くなって、最後は時間が足りなく感じました。国際協力の在り方や政治とその重要性に関する議論が展開されたように思いました。ネットフロアからの質問も刺激的でした。三村先生の過度なイデオロギー化を避けるとのコメントや、羽場先生の「足元を見つめ直す」とのご指摘も示唆的でした。SDGs を通じて国際社会を新たな段階に高めていく展望についての議論となったのではないでしょうか。SDGs の目標達成は、率直に言って困難であることも指摘されました。COVID-19 はそれをさらに難しくしています。その事実を認識した上で、グローバル化した世界の中で国はもちろん企業、市民、私たちが改めて自らを見つめ直し、SDGs の本旨に沿って目標達成に向けて努力する、それが今回のセミナーを通じて得られた共通認識ではなかったかと思います。私はそのように総括させていただきます。本日のセミナーに熱い思いをもってご報告くださいました先生方に、改めて御礼申し上げます。

最後に、本日のSGRAフォーラムに参加してくださったすべての皆さまに感謝いたします。そして、フォーラムを支えてくださった今西さんをはじめ渥美国際交流財団の事務局の皆さまに、心より御礼申し上げます。第67回SGRAフォーラムはこれで終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

あとがきにかえて

李鋼哲 (北陸大学、SGRA、INAF)

2021年9月23日午後、第67回SGRAフォーラムが渥美財団ホールおよびオン ライン(Zoomウェビナー)で開催された。テーマは「誰一人取り残さない:如 何にパンデミックを乗り越えSDGs実現に向かうか―世界各地からの現状報告―」 で、SGRA構想アジアチームにより企画され、渥美国際交流財団関口グローバル 研究会(SGRA)が主催、一般社団法人東北亞未来構想研究所(INAF)の共催 で行われた。国内外から約80名がオンラインなどで参加し、国連が掲げるSDGs の2030年目標達成に向けて世界各地からの報告があった。

総合司会はロスティカ・ミヤさん(大東文化大学講師、SGRA構想アジアチー ムメンバー)が務めた。冒頭に今西淳子SGRA代表より開会の挨拶があり、 SGRAとINAFについて紹介、共催に至った経緯を説明した。

引き続き、李鋼哲がモデレーターを務め、第1部は基調講演、第2部は世界各 地の報告5本、そして第3部は指定討論およびパネル・ディスカッションが順次 行われ、最後に渥美国際交流財団理事・INAF理事長の平川均先生が総括した。

基調講演は、佐渡友哲先生(さどとも・てつ:日本大学大学院講師、INAF理 事)の「SDGs 時代における私たちの意識改革 | で、会場の渥美財団ホールで行 われた。先生は、国際関係論が専門で、北東アジア学会会長など多くの要職を歴 任され、2019年12月には『SDGs時代の平和学』(単著、法律文化社)を出版さ れた。冒頭で「いま私たちに求められていることは、私たちが『持続可能ではな い世界』に住んでいることを知り、そのことを強く意識することであり、『知る →意識する→考える→行動する』というプロセスが重要である」と強調。かつて ゼミ生を引率してインドを始め発展途上国で現地調査を行った実体験と結果を踏 まえながら、「持続可能な発展 | 目標と「持続可能ではない世界 | の現状につい て明晰に分析し、「SDGs達成のためには、私たちの現代文明が行き着いた大規 模化・集中化・グローバル化という仕組みを見直し、循環型社会を強化すること であることに気づかなければならない」と訴えた。

SDGs時代の教員に求められていることは「持続可能な社会の創り手」を育成 すること、この「創り手」とは経済成長に貢献する、いわゆるグローバル人材 (人財) ではなく、いま生活しているこの社会・世界が持続不可能であることを 認識し、SDGsの理念を理解して、地球的諸問題の解決へ向けて行動を起こす地 球市民(global citizen)のことである。これはSGRAが設立当初から提唱する 「良き地球市民」と共通しており、その中身についての重要な示唆点を提示して くれた。

休憩を挟んで第2部では、5本の現地報告があった。

第1報告は「フィリピンにおけるSDGs」について、フェルディナンド・C・ マキト・SGRA大先輩(フィリピン大学ロスバニョス校准教授)により、オンラ インで行われた。フィリピンはパンデミックによりSDGsへの取り組みが大幅に

妨げられており、「COVID-19で死ななくても、仕事が無くて飢えて死んでしまうだろう」という生々しい現場の声を伝えた。しかし、明るい兆しも見えてきており、(1)国内農業の重要性の見直し、(2)多くの有力な民間企業が株主だけではなく社会的役割も重要であるという認識が芽生えていること、(3)大学は学術的な実績だけではなく、社会へのインパクトも評価されつつあるという、とても示唆に富む話であった。

第2報告は「ハンガリーにおけるSDGs」というテーマで、杜世鑫さん(と・せきん:INAF研究員、グローバル国際関係研究所研究員)により行われた。東欧諸国の中でハンガリーのSDGs達成度は高く(世界で第25位)、「水資源の開発」をめぐるハンガリーと中国との協力関係を事例に取り上げ、持続可能な開発における先導的な役割を果たしていることを紹介した。

第3報告は、「中東・北アフリカ地域におけるSDGs」をテーマに、ダルウィッシュホサムさん(アジア経済研究所研究員、SGRAメンバー)により行われた。この地域は過去50年間、平均寿命の伸び率が他のどの地域よりも高く、保健、教育、所得という三つの人間開発指標(HDI)と生活の多様な側面で大幅に改善されていることを紹介すると同時に、2020年の「アラブ持続可能な開発報告書」によれば、この地域では、2030年までにSDGsを達成できる国はないと結論づけられている現実についても紹介し、その原因について分析した。

第4報告は、「朝鮮におけるSDGs」をテーマに李鋼哲が報告した。日本や国際社会であまり知られていない朝鮮の社会と経済開発の実態について分析し、開発途上国でありながら社会主義体制を維持する朝鮮社会の特質について認識した上でSDGsの達成度を評価する必要性を強調し、経済的な困窮の中でも国連と連携しながらSDGsの実現に向けて取り組んでいる現状を紹介した。

第5報告は、「アフリカにおけるSDGs」というテーマで、モハメド・オマル・アブディンさん(参天製薬㈱、SGRAメンバー)が報告した。スーダン出身のアブディンさんは、2019年4月に30年間に及んだ独裁体制がやっと崩壊し、民主化に向けて暫定政府が発足したが、半年後にパンデミックが猛威を振るい始めた状況のなかで、国境封鎖やロック・ダウンを含む厳しい非常事態宣言が行われ、スーダン経済に及ぼした影響について紹介し、収入を保障できない貧困国における感染対策実行の難しさについて述べた。

以上の報告に対し、羽場久美子先生(神奈川大学教授、INAF副理事長)と三村光弘先生(ERINA主任研究員、INAF理事、北東アジア学会会長)がコメントした。続いて基調講演者と報告者全員によるパネル・ディスカッションが行われ、SDGs実現に向けての現状およびパンデミック対策や問題点など重要な論点について白熱した議論が交わされた。

最後に、平川均先生が総括した。パンデミックによる世界の現状について、豊富なデータによってワクチン接種における先進国と開発途上国の格差問題について取り上げ、グテーレス国連事務総長とテドロス世界保健機関(WHO)事務局長の訴えを紹介して締めくくった。

(李鋼哲「第67回SGRAフォーラム『誰一人取り残さない:如何にパンデミックを乗り越え SDGs実現に向かうか─世界各地からの現状報告─』報告」より転載)

講師略歴

■佐渡友 哲 【さどとも・てつ】 SADOTOMO Tetsu

日本大学大学院講師。専攻は国際関係論、平和学、東アジ ア地域論、開発教育。横浜市生まれ。日本大学大学院法学 研究科修了後、鹿島平和研究所客員研究員、秋田経済法科 大学法学部助教授・教授、日本大学法学部教授を経て現職。 その間、米国オハイオ州立大学マーションセンター、英国 オックスフォード大学難民研究センター、タイ国チェンマ イ大学 GMS 研究センターなどで客員研究員、北東アジア学 会会長などを歴任。東北未来構想研究所(INAF)理事、自 治体国際化協会 (CLAIR) 地域国際化推進アドバイザーな どを務める。

近著に『SDGs 時代の平和学』(単著)、『国際関係論』(共編 著)、『東アジアの重層的サブリージョンと新たな地域アー キテクチャ』(共著)、The New International Relations of Sub-Regionalism (共著) など。

■ フェルディナンド・C・マキト Ferdinand C. MAQUITO

SGRA フィリピン代表。SGRA 日比共有型成長セミナー 担当研究員。フィリピン大学ロスバニョス校准教授。 フィリピン大学機械工学部学士、Center for Research and Communication (CRC: 現アジア太平洋大学) 産業経済学修 士、東京大学経済学研究科博士、テンプル大学ジャパン講 師、アジア太平洋大学 CRC 研究顧問を経て現職。

■ 杜 世鑫 【ト・セキン】 Shixin DU

グローバル国際関係研究所 (IGIR) 研究員、東北亞未来構 想研究所(INAF)研究員。青山学院大学国際政治経済学研 究科博士後期課程修了、博士 (国際政治学)。専攻分野は国 際関係史(冷戦史)、欧州=アジアの国際関係・地域協力。 関心領域は、1956年のハンガリー事件(革命)と中国、一 帯一路構想と中東欧。

■ ダルウィッシュ ホサム DARWISHEH Housam

ジェトロ・アジア経済研究所 地域研究センター研究員。 専門は、中東・北アフリカ地域の現代政治、地政学、国際 関係。2002年、ダマスカス大学英文学・言語学部学士。 2006年、東京外国語大学大学院地域文化研究科平和構築・ 紛争予防プログラム修士。2010年同博士。東京外国語大 学大学院講師・研究員、ジェトロ・アジア経済研究所研究員、 米国Georgetown University 現代アラブ研究所の客員研究 員を経て、現職。主な著作に "Egypt-Sudan Relations: The Dynamics of Changing Power Relations in the Nile River Basin and Horn of Africa" (IDE Middle East Review Vol. 7, 2019年)、「エジプトの司法と『1月25日革命』―移行期に おける司法の政治化」(玉田編『政治の司法化と民主化』晃 洋書房2017年) などがある。

■李 鋼哲 【り・こうてつ】 LI Kotetsu

中国延辺朝鮮族自治州生まれの朝鮮族。1985年中央民族大 学(中国)哲学科卒業後、中共北京市委党校大学院で共産 党研究、その後中華全国総工会傘下の中国労働関係大学で 専任講師。1991年来日、立教大学大学院経済学研究科博士 課程単位修得済み中退後、2001年より東京財団研究員、名 古屋大学研究員、総合研究開発機構 (NIRA) 主任研究員を 経て、2006年より北陸大学教授。2020年10月、一般社団法 人東北亞未来構想研究所を有志たちと創設、所長に就任。 日中韓+朝露蒙など東北アジアを檜舞台に研究・交流活動 を行う。SGRA研究員および「構想アジア」チーム代表。 近著に『アジア共同体の創成プロセス』(編著、2015年、日 本僑報社)、その他論文やコラム多数。

■モハメド・オマル・アブディン Mohamed Omer ABDIN

1978年、スーダン(ハルツーム)生まれ。参天製薬株式会 社社企画本部CSR室勤務。2007年、東京外国語大学外国語 学部日本課程を卒業。2009年に同大学院の平和構築紛争予 防修士プログラムを終了。2014年9月に、同大学の大学院 総合国際学研究科博士後期課程を終了し、博士号を取得。東 京外国語大学で特任助教、学習院大学特任講師を経て現職。 特定非営利活動法人スーダン障碍者教育支援の会副代表。

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦:多様性の中に調和を求めて」 今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄煕、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15発行
- SGRA レポート04 第1 回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2 回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア:経済協力をどう考えるべきか」 平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一歩」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3 回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える: ライフスタイルからの工夫」 木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10発行
- SGRA レポート08 第4 回フォーラム講演録 「IT 教育革命: IT は教育をどう変えるか」 臼井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蒋 恵玲、楊 接期、 李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20発行
- SGRA レポート09 第5 回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義:対話と共生をキーワードに」 ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6 回フォーラム講演録 「日本とイスラーム:文明間の対話のために」 S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8発行
- SGRA レポート12 第7 回フォーラム講演録 「地球環境診断:地球の砂漠化を考える」 建石降太郎、B. ブレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区:フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12発行
- SGRA レポート14 第8 回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」+宮澤喜一元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション 平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B.ヴィリエガス 日本語版 2003. 1. 31 発行、韓国語版 2003. 3. 31 発行、中国語版 2003. 5. 30 発行、英語版 2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟―請求と処理状況に対する考察―」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育 | 苑復傑、遊間和子 2003.5.30発行
- SGRA レポート17 第10 回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」 白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30発行、英語版2003. 6. 6発行
- SGRA レポート18 第11 回フォーラム講演録 「地球市民研究:国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本 幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 栄濬 2003 12 4発行
- SGRA レポート20 第12 回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力:СОР3 の目標は実現可能か」 外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6.30発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争-どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20発行
- SGRA レポート23 第13 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」 宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行

- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助:その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14 回フォーラム講演録 「国境を越える E-Learning」 斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート26 第15 回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫?」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24発行
- SGRA レポート27 第16 回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」 竹田いさみ、R. エルドリッヂ、朴 栄濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」 宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校煕、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18 回フォーラム・第4 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流:東アジア地域協力における ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート30 第19 回フォーラム講演録 「東アジア文化再考 自由と市民社会をキーワードに 」 宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20発行
- SGRA レポート31 第20 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合:雁はまだ飛んでいるか」 平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト 2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート32 第21 回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか 留学生 」 横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、 角田英一 2006. 4. 10発行
- SGRA レポート33 第22 回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート34 第23 回フォーラム講演録 「日本人と宗教:宗教って何なの?」 島薗 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、 セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10発行
- SGRA レポート35 第24 回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環〜私が分別したごみはどこへ行くの?〜」 鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート36 第25 回フォーラム講演録 「IT は教育を強化できるか」 高橋冨士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20発行
- SGRA レポート37 第1 回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」 池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート38 第6 回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日:多様化する韓国の対日観」 金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート39 第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史~私たちの出会いと将来~」 黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30発行
- SGRA レポート40 第27 回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題~ひとの生活との関わりを考える~」 多紀保彦、加納光樹、プラチヤー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート41 第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」 島薗進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート42 第2 回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年―無理解と失敗から相互理解と信頼へ―」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008.3.1発行
- SGRA レポート44 第29 回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ 2008. 6. 25 発行

68

- SGRA レポート45 第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか~ 日本、中国、シンガポール~」佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20発行
- SGRA レポート46 第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ:日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」 東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10発行
- SGRA レポート47 第32 回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」 清水 論、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8.8発行
- SGRA レポート48 第3 回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く一 アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート49 第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」 東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート50 第8 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」 平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート51 第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」 大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15発行
- SGRA レポート52 第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21 世紀の課題」 宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チィ、 劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート53 第4 回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること~ TABLE FOR TWO ~」近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート54 第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか: 東アジアのエリート高校教育の現状と課題」玄田有史 シム・チュンキャット 金 範洙 張 健 2010. 5. 10発行
- SGRA レポート55 第38 回フォーラム講演録 「Better City, Better Life 〜東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル〜」木村建一、高 偉俊、 Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 栄珠、王 剣宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート56 第5 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」第一部(北京):「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉 第二部(フフホト):「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン 2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート57 第39 回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、 ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島薗 進、陳 継東 2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均 2011. 2. 15発行
- SGRA レポート59 第10 回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300 年前の東アジア地域交流」 朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10発行
- SGRA レポート60 第40 回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」 田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム・チュンキャット、F・マキト 2011. 11. 30発行
- SGRA レポート61 第41回 SGRA フォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川惠市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18発行
- SGRA レポート62第6 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録
「Sound Economy ~私がミナマタから学んだこと~」 柳田耕一
「内モンゴル草原の生態系:鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉 2012. 6. 15 発行

- SGRA レポート64 第43 回 SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」 朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20発行
- SGRA レポート65 第44 回 SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21 世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」 赤堀侃司、影戸誠、曺圭福、シム・チュンキャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解(1994-1998 年)」(日本語・英語・中国語)沼田貞昭 2013. 10. 20発行
- SGRA レポート67 第12 回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」 平川 均、加茂具樹、金 雄煕、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート68 第7回 SGRA チャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」 (日本語・中国語・英語) 宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート69 第45 回 SGRA フォーラム講演録「紛争の海から平和の海へ 東アジア海洋秩序の現状と展望 」 村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 栄濬 2014. 10. 20発行
- SGRA レポート70 第46 回 SGRA フォーラム講演録「インクルーシブ教育:子どもの多様なニーズにどう応えるか」 荒川 智、上原芳枝、ヴィラーグ ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20発行
- SGRA レポート71 第47 回 SGRA フォーラム講演録「科学技術とリスク社会 福島第一原発事故から考える科学技術 と倫理 – 」崔 勝媛、島薗 進、平川秀幸 2015. 5. 25発行
- SGRA レポート72 第8 回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」 佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20発行
- SGRA レポート73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回 SGRA フォーラム講演録「アジア経済のダイナミズムー物流を中心に」李 鎮奎、金 雄煕、榊原英資、安 秉民、ド マン ホーン、李 鋼哲 2015. 11. 10発行
- SGRA レポート74 第49回 SGRA フォーラム講演録: 円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」 劉 傑、平野健一郎、南 基正 他15名 2016. 6. 20発行
- SGRAレポート75 第50回SGRAフォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらし―環境と女性と未来に向けて」神﨑智子、斉藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27発行
- SGRA レポート76 第9回 SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中200年—文化史からの再検討」 劉 建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力―共進化アーキテキチャの模索」孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10発行
- SGRA レポート78 第51回 SGRA フォーラム講演録「今、再び平和について―平和のための東アジア知識人連帯を考える―」南基正、木宮正史、朴栄濬、宋均営、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27発行
- SGRA レポート79 第52回 SGRA フォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」 劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ 2017. 6.9発行
- SGRA レポート80 第16回日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力―新たなアジア型モデルの模索―」 金雄熈、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート81 第56回 SGRA フォーラム講演録「人を幸せにするロボット―人とロボットの共生社会をめざして第 2回―」稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20発行
- SGRA レポート82 第57回 SGRA フォーラム講演録「第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性―蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニバートル、向正樹、孫衛国、金甫桄、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10発行
- SGRA レポート83 第58回 SGRA フォーラム講演録「アジアを結ぶ?『一帯一路』の地政学」朱建栄、李彦銘、朴栄 濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行

70

- SGRA レポート84 第11回 SGRA チャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」塚本麿充、呉孟晋 2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート85 第17回日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力:各アクターから現状と今後を聞く」 孫赫相、朱建栄、文炅錬 2019.11.22発行
- SGRA レポート86 第59回 SGRA フォーラム講演録「第3回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性:17 世紀東アジアの国際関係―戦乱から安定へ―」三谷博、劉傑、趙珖、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔妵姫、趙軼峰 2019.9.20発行
- SGRA レポート87 第61回 SGRA フォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!?」 沈雨香、吉田文、シン・ジョンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行
- SGRA レポート88 第12回 SGRA チャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」 刈間文俊、王衆一 2020. 9. 25 発行
- SGRA レポート89 第62回 SGRA フォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…? ——不都合な真実を超えて」 ルウェリン・ヒューズ、ハンス = ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵 2019. 11. 1 発行
- 第63 回 SGRA フォーラム講演録「第4回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性:『東アジア』の誕生―19世紀における国際秩序の転換―」三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方 2020. 11. 20発行
- SGRA レポート91 第13回 SGRA-V カフェ講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」林 泉忠 2020. 11. 20発行
- SGRA レポート92 第13回 SGRA チャイナ・フォーラム講演録「国際日本学としてのアニメ研究」大塚英志、秦 剛、 古市雅子、陳 龑 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート93 第14回 SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」稲賀 繁美、劉 暁峰、塚本麿充、王 中忱、林 少陽 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート94 第65回 SGRA-V フォーラム講演録「第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性:19 世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」朴 漢珉、市川智生、余 新忠 2021. 10. 05 発行
- SGRA レポート95 第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係:これからどうすればいいか」 小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 栄濬、西野 純也 2021. 11. 17発行
- レポートご希望の方は、SGRA 事務局(Tel: 03-3943-7612 Email: sgra@aisf.or.jp)へご連絡ください。

SGRA レポート No. 0097

第67回SGRAフォーラム

「誰一人取り残さない」 如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現に向かうか 一世界各地からの現状報告一

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA) 〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8 Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512 SGRAホームページ: http://www.aisf.or.jp/sgra/ 電子メール: sgra@aisf.or.jp

発行日 2022年2月10日発行責任者 今西淳子印刷 (株)平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。 ©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.

NO. 97

SDGs 実現に向かうか如何にパンデミックを乗り越え「誰一人取り残さない」

世界各地からの現状報告―

